特220
302

茅原華山先生講演

日本の女性に告ぐ

一名　モダーン女大學

始

序（はしがき）

私は前後八年も西洋を遍歴して、日本と西洋との人間生活を比較して見たのであるが、一言にして之を盡せば、西洋は所謂個人主義で徹底して居るから、男女あり夫婦あつて、親子のない生活である。日本はこれに反して、親子があり、家族があつて、男女夫婦のない社會である、若くは社會であつた。日本で昔し嫁に行くといへば、家族の中に埋沒して女としての人格を認められなかつたのである。所が西洋に斯ういふ話しがある。日本人の宿つて居つた或ホテルの前に、乞食のやうな老人が居つた。自動車を謳つて、毎日其ホテルの前を通る紳士が、時々車を停めて、老人に金を與へたさうだ。日本人が之を見て、感心な親切な紳士であると思つて居た所が、豈圖らんや、其乞食らしい老人は、紳士の實父であつたといふことであつた。日本が一の極端に行き、西洋が他の極端に行つたことは、爭はれない歴史上の事實である。日本が過去の傳統を其儘保守することの出來ないのは、現在に於ける日本の社會的趨勢を見ても解ることだが、日本を西洋の通りにしようとするのも間違ひであることは、今や何人も認識した所であらう。理性を根柢とした男女の家庭生活を社會の單位とすると同時に、縱ひ都會の生活では、

家族制度が破壞されたとしても、家族的精神、家族的感情を長養せねばならぬことはいふまでもない。日本の現在及び將來の生活は斯くの如くに二段構へにならねばならぬ。そして日本は事實斯かる生活の建設に向つて躍進しつゝあるのである。私は日本の男女が此客觀的情勢を認識して、之を日本全體に樹立するに勉めたならば、日本は舊日本でもなく、といつて、西洋の摸倣でもなく、此に新しき生活、新しき文化を創造し得るのである。

私の女性觀は要するに男子の觀た女性觀である。之を讀む女性は、其境遇、其位置、其職業に從つて之を適當に取捨應用するだけの自發力がなければならぬことを附け加へて置く。

解り易く書きこなした積りであるが、小說ではないから、中には極く若い人には、理會し難い所もあらう。それは理會のある人々が、若い人々の爲めに解釋して下さることを切望する。

著　者

日本の女性に告ぐ

目　次

赤の章　人は生きねばならぬ……二
一、死ぬより樂はなかりけり……二
二、女は弱し母は强しではいけない……五
三、女は何故弱かつたか……八
青の章　能く相手（自然と人）を觀ねばならぬ……一一
四、亭主の好きを客に振舞へか――客の好きを客に振舞へか……一一
五、感じたものを直ぐに嘸舌るのはいけない……一八
六、感じたことを直ぐに行ふのもいけない……二四
黃の章　相手を見た上に自己のものを造らねばならぬ……二七

七、經濟と言ふ意味 …… 三五
八、働きかけて行く生活 …… 四〇
九、人生は經濟である、經濟なくんば人生なし …… 五五
白の章　有閑マダムの御氣の毒な生活 …… 五〇
十、植民地の有閑マダム …… 五〇
十一、母親と子供の病氣 …… 五六
最後の章　運動と飲食 …… 五八
十二、勉強百圓運動百圓 …… 五八
十三、運動が積極的經濟の基調 …… 六〇
十四、總てが人間の生きる爲 …… 六九
十五、三度の食事 …… 七二
〔附〕御嬢さん …… 一
少し六ケ敷いことを …… 六
目次終

日本の女性に告ぐ

一名　モダーン女大學

茅原華山講演

本篇は私が東京及び大阪滯在中、大阪府及び近傍の各地の女學校や婦人會にて講演したものを、自ら筆錄したのである。生徒は實に珍らしい御話しを聽いたといふので、大喜びであつた。校長始め職員も結構な御話しを聽いたといふので、生徒に聽き流してはならないと訓諭した處もあつた。

實は私が多年全國を遍路して、講演したものを練磨し修正し追加し增補したものである。

婦人會に言ふて、女學校には言ざるものがある。そは婦人會員は既婚婦人が多いにも拘らず、女學校生徒は盡く處女――未婚者であるから、其間自ら差別し分別する所がなければならぬからである。

本篇には女學校や、處女會や、否、婦人會に於ても言はざるものまでも附け加へてある。そは講演を聽く時の刺戟と、文章を讀む時の刺戟とは、自ら全く異なるからである。講演は熱して聽くから、專ら感情に支配され、文章は冷靜に讀むことが出來るから、理性の支配を受ける餘地があるからである。故に本篇は私の綜合的日本女性論である。

私はストリンドベルヒの如く『女性を惡くむもの』（ウーマン・ヘーター）ではない。文學者は個人的感情から自由に放筆するが、經世的見地からして女性を觀れば、其經濟生活、社會生活及び後世子孫に及ぼす

影響の實に大なるものがある。而も間々恐怖すべきもの、戦慄すべきものがある。日本國民を救ふには、先づ日本の女性から救はればならぬことを痛感するものである。

私は東京と大阪との氣質が異なるが如くに、女性の氣質が處に依つて甚だしき相異があることを看取するものである。此相異を認識した上に、日本の女性を全體的に觀察し、以つて其繕ふべき所、即ち指導原理を打ち樹てようとするのが、本篇の根本精神である。

文體は女學校に於ける講演の型に從つて居る、講演の時には、漢語の熟語を使はない。使ふ時には必ず意義を解説する。尤も普遍的に行はるゝ漢語は此限りではない。

赤兒より二十に至るまでを赤年といひ、二十一より四十に至るまでを青年といひ、四十一より六十に至るまでを黄年といひ、六十一より以後を白年といふ、人は健康にして長生せねばならぬ。故に此小册子を分つて赤、青、黄、白の四章となし、別に一章を添へてある。

赤の章　人は生きねばならぬ

一、死ぬより樂はなかりけり

制服の處女とオールド・モダーン・ボイ

皆様は制服の處女である（笑）學校各學年の生徒が此一堂に集まられたのであるから、制服の處女オン・パレードである。所が遺憾ながら私はシャンの青年ではない（笑）左れど私は決して古嗅い人間ではない積りである。從つて古嗅いことなどは言はない積りであるから、モダーン・ボイである。左れど私の年齢は皆様の三倍以上であるから、謙遜してオールド・モダーン・ボイとして置きませう。

私のいふことは、聽いても聽かないでも、憶えても憶えないでも可いのである。何となれば試驗の點數に關係がないからである（笑）鹿爪らしく聽く必要がないのみならず、嫌になつたら手を擧げなさい。何時でも中止します。

樂の樂は樂ではない。苦より得たる樂は眞の樂

日本の諺に『樂は寢て待て』とあります。或意味では日本は怠けものゝ世界といへる。所謂有閑マダムなどは怠けものゝ標本である。又『寢るより樂はなかりけり』といふ諺もあります。愈々以つて怠けものゝ世界である。（笑）西洋人は働かんが爲めに休み、亞細亞人は休まんが爲めに餘儀なく働くといひますが、亞細亞人の根本の缺陷は此樂をしたがる一點にある。土耳古だか波斯だかの諺に『走つて居るよりは歩いて居るのが樂、歩いて居るよりは立つて居るのが樂、立つて居るよりは坐つて居るのが樂、坐つて居るよりは寢て居るが樂、寢て居るよりは死んだ方が樂だ』とあります。（大笑）これでは寢

るより樂はなかりけりではなくして『死ぬより樂はなかりけり』である。(笑) 然しながら皆さんは私と違つてこれから生きて行かねばならぬのである。私の如きは今日までに大分長く生きて來たのである。『天國に結ぶ戀』(笑)といふやうな眞似は、最早私には出來ないことであるが皆樣より早く死ぬべき運命を持つて居る。これに反して、皆樣はこれから生きねばならぬのである。日本の女性の中には――今日は女性にお話しをするのだ――若い癖に死にたがるものが少なからずあるさうだ。女學校で聞く所に依れば、家庭に於ける不幸や、學校に於ける不成績の爲めに、死にたがるものもあるさうだ。これは意志の弱いことを示すだけで、皆樣は苟も人間として生を此世に享けた限りは、全力を擧げて生きねばならぬのである。生きるとは樂をする意味ではない。生活苦、人間苦、世界苦、苦しむことであるかも知れない。難きを避けて易きに就くは水が高きより低きに流るゝが如くに、雨が木の葉が地に落つるが如くに、人間及び自然の傾向であります。人間の進むには、最小抵抗線を取つて進むのが當然で、態々最大抵抗線を取つて精力を浪費する必要はない。左れど生きるに、最小抵抗線まで避けようとするのは、決して生きる所以ではない。生きることは進むことである。進むには必ず抵抗に會はねばならぬ。船が進むには

水の抵抗を受けねばならぬ。故に生きて進むことは、易きを避けて難きに就かねばならぬのである。

故に生きるには寢てばかりは居られない。坐らねばならぬ。坐つてばかりは居られない。立たねばならぬ。立つてばかりは居られない。歩かねばならぬ。時としては走らねばならぬ。左らば生きて進む時には樂といふものがないかといふに、大いにある。それは苦に打ち勝つた所にある千艱萬難を征服して生の凱歌を奏でた所にある。これが本當の生きた樂しみである。

西洋の女學校の話し

二、女は弱し母は強しではいけない

さて私が此で一つ古いお話しを致しませう。日本の古い話しではなく、私が最初の洋行の時、英國の後にある蘇格蘭のグラスゴーといふ造船工業で名高い市に遊びに行きました。それは今から二十何年前のことでありますが、或日のこと、女學校を參觀に行きました。私は受持の先生の許しを得て生徒に三つの質問を提出しました。最初の二つは此に用がないから略しますが、最後の一つは、貴女がたは學校を卒業して何うなさる積りで

あるかといふのである。其生徒といふは、大抵貴女方と同じやうな年齢であります。私は日本では女子教育の目的が賢母良妻といふのであるから、蘇格蘭も其通りで、卒業したならば、良縁を求めて結婚するのだと答へるであらうと豫期して居つたのです。所がアニ計らんや、アニばかりではない、弟も計らんや（笑）で、卒業をして結婚と答へたものは一人もなかつた。或はタイピストとなるとか、これは翻譯を待たずに皆様のご承知のことである。ステノグラフハー（速記者）になるとか、セールス・ガール（賣子）になるとか、會社員になるとか、銀行のクラーク（書記）になるとか、ミリナリー（女小物商）になるとか、中には新聞記者になるとか、一大著述を爲して一世を驚かさんといふやうなものばかりであつた。即ちそれ〴〵大小は違ひますが、人間としてのアンビション即ち雄志のあることを示したものであつて、一人として結婚するといふものがなかつた。依つて私は平たく日本の事情を話した所が、先生は蘇格蘭も昔しは卒業――結婚といふ順序であつたが、生活難の風が吹き捲くつて、生活問題が女性の間にも殺到したので、卒業――職業――結婚といふ順序に爲つたのである。遠い〳〵日本にも遠からず此世界的の風が吹き込むに相異ないから、日本の女性も相率ゐて、職業婦人になる時が來るに相違ないといひま

したが、詳しく申上げるまでもなく、果して其通りになつたではありませんか。

女も働かねばならぬ

皆様の中には、家庭が豐かで所謂大ブルジョアで、外に出て職業婦人になる必要のない御方も澤山ありませうが、これからの女性は如何なる位置にあるにもせよ女性自身の進歩の爲めに、社會國家の進歩の爲めに、そして人類全體の進歩向上の爲めに、盡く勞働せねばならぬことは論のないことであります。久遠の生命を持つといふ詩でさへも、時代が變れば陳腐になる。昔しキングスレーといふ詩人が、『男は働かねばならぬ、女は泣かねばならぬ』といひましたが、今では女も泣いてばかりは居られない。働かねばならぬ時が來たのである。

シエークスピーアも古い

シエークスピーアは女は弱く母は強しといひましたが、今では母として強いばかりではなく、女としても亦強くなければならないのである。強いといふは、意志の固い理性の明かなることをいふので、男と喧嘩しても負けない、女相撲になれといふ意味では無論ない。繰返へしていふが、これからの女は徒らに感情に驅られて、直きに逆上して、吾を忘れるやうなことはなく、意志の固い理性の明るい、そして操持ることの堅實なる女でなければならぬ。

三、女は何故弱かつたか

——そは經濟生活と遊離して居つたからである——

大阪の女

女が何故弱かつたか、其原因は種々ありませう。そして西洋でも女のことを弱性即ちウイーク、セックスといひますから、女は骨格や腕力では、或は永遠に男よりも弱いかも知れませんが、私が女は弱くてはいけぬ、強くなければならぬといふは、人間として生活の鍛錬がなければならぬといふ意味である。女か人間としての鍛錬がなかつたから弱いといふは、全く經濟生活から遊離して居つて、泣いてばかり居た爲めでありませう。言葉を換ゆれば、專ら感情や情緒に生きて居つたからでありませう。果して完全なものであるや否やは別問題として、大阪の女には、夫が死ねば、直ちに代つて其營業の采配を揮ひ得るものがある。それは大阪が昔しから商都であつたからであります。

情の制動機

支那の言葉に、人は情に產れ、情に生き、情に死ぬとありますが、私は人間の情——感情を否定するものではない、人間の貴いのは純なる感情、洗錬された感情に生きるからである。左れども智情意などいつて、人間は唯情にばかりは生きられない、智がなければならぬ、意がなければならぬ。何時でも其燃え上がる逆せ上がる感情に、理性といふブレーキ（制動機）をかけられるだけの素養と用意と心の作用習慣がなければならぬのである。

小說よりも事實

日本の姉妹の大多數の讀み物は何んだといへば、重にといはんよりは專ら小說と講談本とである。中には直ちに小說を實行しようとするものさへある。私は自分で小說を書きませんが、小說といふものを多少理會して居る積りである。小說も亦時代の反映で、時代の潮流や人情や風俗や傾向を假託の人物に依つて、象徵化するものでありますから、私は決して小說を讀んではならぬといはないが、先ごろ死んだ直木三十五氏も言つて居た如くに、日本の現代の小說は簡單な戀愛を描いたものばかりである。殊にブルジョアのお嬢さんや奧樣の戀愛を描いたものなどは、實際たあいもないものである。

事實は小說よりも面白しといふが、今日の新聞はニュース本位といつて、言論よりも事實を報道するを主として居るにも拘らず、小說に近い三面記事を讀む外は、一切事實を讀まないで專ら

小説を讀むといふのは、日本の女性が今猶現實生活、事實生活の洗禮を受けないで、古いローマンスに生きようとすることを暴露したものである。今では『お嬢さん』といふは、尊敬の代名詞か侮蔑の代名詞か解らなくなつて了ひました。ハリーウドのスターの名は知つて居るが、一國の首相の名を知らない。爲替のことも物價のことも知らない。米がいくらであり卵がいくらであるこも知らないで、御琴がお上手、御花がお達者、ピアノ、オルガンがお上手、舞踊がお達者（大笑）心中がお上手、三原山に飛び込むことがお達者（笑）といふだけでは、佛國の女記者が日本の『お嬢さん』はホット・ハウス即ち温室のか弱き花である。スマイリング・ドール即ち笑ふ所の人形であるといつたのも無理はないと存じます。

働いて生きねばならぬ時代に、專ら感情の遊戯に生きやうとすれば『お嬢さん』はしまひには勞働婦人の爲めに壓倒されることになります。

青の章　能く相手（自然と人）を觀ねばならぬ

四、亭主の好きを客に振舞へか　客の好きを客に振舞へか

佛蘭西の市長夫人

私が佛蘭西に居つた時、或地方の市長さんの邸に午餐に招かれました。佛蘭西の友人が、私に模範的家庭を見せたいといふので、態々斡旋の勞を取つて呉れたのです。

市長と友人とが前で、私が左、夫人が右で、四人相對して坐つたのでありますが、市長夫人は私が甘いと思つて喰べたものは、必ず更に皿に盛つて呉れるのです。私は佛語は獨逸語よりも不得手で、夫人は英語が全るで語れないのである。それだにも拘らず、私の甘いと思つたものを更に盛つて呉れるのは、人に依つては讀心術を知つて居るとか、第六感が鋭いからといふであらう。佛國の女は東洋人のやうに第六感が強いので有名であります。左れども唯第六感だけ

を働かせては何にもならない。必ずそこに六ケ敷くいへば、客觀的觀察を以つて伴はねばならぬのである。言ひ換へれば、相手を能く觀ねばならぬ。自然にせよ人間にせよ、相手に爲るものを能く觀ないで、徒に第六感を働かせた所で、それは『中らずと雖も遠からず』又は暗中摸索といつて、闇みの中に手探りをするに過ぎない。從つて時としては大間違ひをすることがある。日本の女性の直感力の強いことは、或は佛國の女に劣らないであらう。或は佛國の女以上であるといつても不可はあるまい。唯其異なる所は、佛蘭西の女は相手を眺めつゝ、現實を眺めつゝ直感力を働かすのであるが、日本の女の多數は、相手を眺めないで、現實を眺めないで、只管直感力をのみ働かせるのであります。

亭主の好きを客に振舞へ

そこで日本では『亭主の好きを客に振舞へ』といふ諺がある。これはお客を觀察しない、御客が何を好むかを觀察しないから、そして日本では御客の方で所謂謙遜で、秘密主義で、隱し立てをする、言ひたいこともいはない。御客の中には腹が減つても減らないといふものがある。午前十一時ごろ來ておきながら、晝飯を勸めれば、喰べて來ましたといふ。そして晝飯を出せば其實腹が空いて居るものだから、ウンと喰ふ（笑）不甘いものを

甘いといひ、好かぬものも好きだといふ（笑）そこで眞逆奥様の好きなものを（薩摩芋？）客に振舞ふ譯にも行かないから、亭主の好きを客に振舞ふといふ事に爲つたのではありますまいか。亭主が鰻が好きだからといふので、鰻のご馳走ならまだ結構であるが、亭主がニンニクが好きだといふので、臭いニンニクを喰べさせられては、實際堪まらないではないか。（大笑）亭主の好きを客に振舞へといふは、何うしても非論理である。本當の所をいへば、お客を歡待する積りならば『客の好きを客に振舞へ』でなくてはならぬ。

客の好きを客に振舞へ

此に『客の好きを客に振舞へ』の好實例がある。そは私が愛蘭に遊んだ時のことである。ドネゴールといふ片田舍に居るオーコンカンノンといふ人の家に宿つたのだ。最初の日雪が降つて居たので、奥様と一處にストーヴの前で四方山の話をして居たが、奥様が話の最中に、倫敦で何んな生活をして居るかと訊かれたから、何の氣なしに、倫敦では朝、寢ながらコーヒーとオートミールとハムエッグズとトーストバンとを喰べる。寢ながら倫敦タイムスとデーリー・テレグラフとモーニング・ポストとデーリー・メールとそれから何々の新聞を讀んで、十一時ごろ始めて起きて顏を洗ひ、それから外出するのであるといつた。（西洋

ではこんな眞似をするものが澤山ある）夫人と私との話しは直ぐに外に轉じて、私はそれを忘れて了つた。私は二階の一室に寢たのであるが、朝戸を叩くものがあつた。奥様がコーヒーにオートミールにハムエッグズにトーストパンを盆に載せ、裏に一枚の新聞紙があつた。私が驚いて起き上らうとした所が、其奥様は起きなくても宜しい、倫敦のやうになさいといつて、私の寢臺の傍にあつた小さなテーブルの上にそれを載せ（女學生の中に感嘆の聲が起つた）それから、倫敦タイムスはまだ來ないから、アイリッシュ・タイムスで間に合はせて下さいといつて、それを私に手渡して出て行かれた。

これは事實上客の好きを客に振舞つたのではないか。

序でながらいふが、此奥様は英國の大學と佛伊獨の大學を出た人であつて、私が十日ばかり滯在して居る中に、私が私の漢詩を英文に譯し、奥様は更にそれを英詩に直して、アイリッシュ・タイムスに投書した所が、盡く採錄された。

歐米に行けば、語學の先生は皆女で、私がボストンに居つた時には、ミス・ギヴンといふ女の校長さんが、私の英文添削の任に當つたのであるが、此婦人の添削したものが、紐育の大新聞であるタイムスやサンやボストンのトランスクリプトといふやうな大新聞に掲載された。日本の女で斯かる眞似をし得るものは、先づ以つて一人もあるまいと思ふ。

女らしかれ人間らしかれ

それから日本では『女らしかれ』といふが、何ういふ譯か『人間らしかれ』とは決していはない。私は女が良妻賢母になるのは、其天職であると信じて居るものであるが、眞の良妻賢母は、人間としての建築が出來上つて居て、始めて實現し得るものである。唯女らしいといふだけではならない譯だ。單に女らしかれといへば、單に異性であれといふことに取られないこともない。人間としての男、人間としての女を作らねばならぬ。そこで男女といふ性の差別の上に、男女の間に人間といふ共通點が出來て來る譯である。

私に語學を教へた婦人連は、皆人間としての女である。此等の婦人に接するは、男と女即ち異性と異性とが接するのではない。人間と人間とが相接するのである。私が今でも敬服して居るのは、倫敦で私に獨逸語を教へた女で、獨逸の或大學教授の娘があつた。美しい優しい女であつたが、同時に凜然として侵すべからざるものがあつた。其女と話しをして居れば、日本の女に接した時のやうに、始めから終ひまで女の匂ひがするのとは異つて、人間の匂ひがして來るの

である。而も一抱へあれど柳は柳かなで、立派な女性である。

然るに日本では男女が相對すれば、男と女とが相對するのである。これは危險此上もないことで、日本で男女の交際が今でも制限されて居るのは、斯うした理由があるとに氣附かねばならぬ人間と人間とが交際するやうになれば、男女の自由交際が始めて許されるのである。そして何の不思議もないことになる。

御馳走の浪費

話は前に戻つて、日本の所謂亭主の好きを客に振舞へといふのは、恐ろしき浪費を惹き起すことがある。私が何時ぞや東北地方の或旅館に宿つた。土地の人が餘りにエラく私を吹聽したものであるから、珍客のご入來といふので、盛んにご馳走を拵へて呉れた。魚がお好きだらうといふので、刺身やてり燒を拵へて見たが、若し好かないといはれては困るといふので、牛肉を材料にして妙なものを拵へた。其上に海老もあれば鮑もあり、山海の珍味といふが、山と海と野の珍味が添へられたのである。所が私は畫に西洋料理を澤山喰べたものだから、一向に食慾がない。依つて刺身と野菜とを一寸喰べてお了ひにした。

宿の主婦の失望落膽は此上もなく、私の處へ遣つて來て、家内中で寄つてたかつて拵へたもの

のを何故召し上つては下さらないのかと私を詰つた。私は何故ご馳走を拵へる前に、私に相談して呉れなかつたのか、相談して呉れないで勝手にあの通りの澤山のご馳走を拵へ、そして喰べないといつて怒られては、怒られる方が無理なのか、怒る方が無理なのか。少し考へて貰ひ度いと答へた。

そして私に計らないで御馳走を拵へ、そして私が殆ど手を附けなかつたご馳走の代價は、私が拂はねばならぬといふことになつては、私の迷惑と浪費とは此上もないことではないか。(大笑)

考へるとは空想せよといふ意味ではない

茲にいふ『考へる』といふことは、決して昔しの佛教家なんどのやうに、大千世界とか三千世界とかいふ、頭の中で主觀的な大空想を畫く意味ではない或軍部の前大臣は實に能く喋舌る人であるが、概念的で抽象的である。西洋の新聞は東洋的なる主觀的理想主義だといつた。齋藤内閣の五相會議の時分に農村だ教育だといつて盛んに喋舌る他の四相は具體的の御意見はといへば、宜しいといつて又最初から同じことを喋舌り返すには、四相もほと〳〵閉口したさうだ。自然も人生も觀察せず、單に頭の中で空想を描く理想主義だと

いふのである。東洋人のことを夢想的理想主義といつたものがある。要するに東洋人には頭の中で勝手に考へる風がある。これは決して今日の所謂そして私の所謂『考へる』といふことではない。近代の意味に於ける『考へる』といふことは、現實を如實に觀ることであり、相手を考察することであり、そして相手と自分とが融合燃燒することである。自分と相手とが融け合つて、そこに實際的に行ふべき意見が成り立つをいふのである。

五、感じたものを直ぐに喨舌るのはいけない

喨舌る奥樣 其一

日本人は感じて直ぐに行ふ、それから感じて直ぐに喨舌る。先づ感じて直ぐに喨舌る方からいへば、女性は進化論上の理由から、喨舌る機關が非常に發達して居るといふが、私は屢々感じて喨舌る奥樣に出會して閉口したことがある。東京の或る親戚の家で原稿を書いて居た所が、親類の元氣な奥樣が來て止め度もなく喨舌る。姦の字は女が三人集つた姿で、それをかしましいといふのであるが、三人などは要らない、一人で姦しいのである から、此女は一人で三人分を兼ねて居るのである（大笑）何を喨舌るかと聽いて居れば、全くの

百パーセント・ナンセンスである。朝起きて戸を開けたら、お天氣であるのに雨が降つて居たことから（大笑）顏を洗ふ時に、練齒磨と石鹼とを間違へたことから（笑）飯を喰ふ時に、焚き立ての飯の代りに冷や飯を盛つて、仕方なしに朝からお茶づけを喰つたことから（笑）外出するときに、下駄を倒に履かうとしたことから（笑）往來で撒水車を除けやうとして轉んだことから（笑）お土產に菓子を買はうとして酒屋に飛び込んだことから（笑）尋ねる人の家を間違へて隣りの家へ飛び込んで大目玉を喰つたやうな話しに夢中になつて居るのである。

八釜しくて邪魔になるから默つて居て呉れといふと、成る程二三分は靜かになつたが、又吾を忘れて喨舌り出す（笑）何處の奥さんは顏が綺麗だが、丈が低くて足が曲つて居るから、其歩く時は全るで家鴨のやうだとか（笑）某の女は能く怒るから、ブルドッグのやうだとか（笑）某の女は顏面神經痛であつて始終顏がふるへて居るから地震のやうだとか（笑）某の女はオデコでヒステリーだから、デコヒスであるとか（笑）某の女は色の黑いのにベタ〳〵おしろいを附けてゐて、顏が鉛色になつてゐるから、銀鼠であるとか（笑）某の女は能く太つて居るから、乘合バスのやうであるとか（笑）某の女は目も耳も鼻も口も手も足も小型だから豆色紙のやうだとか（笑）

某の女は近眼で脊中が曲つてせむしのやうだ、其上足が悪いから三拍子だとか（笑）某の女は丈が高くて鼻にばかりおしろいを附けるから、夏の富士山だ（大笑）といふやうなことをいつて笑つて居る。

嘘舌る奥様　其二

或奥様は客が來ると、亭主をそつち退けにして、顔を仰向にして天井を睨むこと高射砲が飛行機を狙つた時のやうな様子で、息子の自慢を始める。娘の自慢を始める。それから平生信仰する神様だか稲荷様だかの自慢を始める。そして茅原さんの病氣の癒つたのは、天理のみことがまだ此世に茅原さんを生かして置かねばならぬといふので、癒して下さつたのであるといふ。西洋では社交上では一切宗教のことは語らぬことにして居る。そは互に感情を害することを虞れるからである。然るに日本ではそんなことには一向に頓着なく、神様を信仰しない人はお氣の毒で堪まらぬといふやうなことをいひ出す。

嘘舌る奥様　其三

又他の奥様は、私を坐敷に通すや、先づ一くさり娘の自慢を始める。お茶を出すと同時に、又一くさり娘の自慢を遣る。話の中に二度や三度なら可いが、七度も八度も娘の名が出て來る。電車の中で會へば又娘の自慢が出る。路で會つて立ち話しをすれば、又娘の自慢が出る。そこへ若し何處かの娘が通れば、其娘を流し目で見送つて、あの娘は顔立ちがシャンだが品が悪い、そして又自分の娘の名が出て來る。これでは全く自分の娘に醉つ拂つて居るのである。嚴父慈母といふが、娘や子息の養育や教育の任に當るものは重に母であるこれからの母は慈母であつて同時に嚴母でなければならぬ。

子供を育てるには、先づ子供といふ相手を冷靜に眺める必要がある。そして子供の天賦に從つて、之を養育し、之を教育せねばならぬのである。子供に醉ッ拂つて了つては、我儘娘、我儘子息を作るばかりである。

嘘舌る奥様　其四

或奥様は嘘舌り出すと自然に腰が坐つて來る。そして朝飯時であらうと、晝飯時であらうと、晩飯時であらうと、そんなことは一向に頓着なく、嘘舌り續ける。人のお腹の減ることは氣が附かないが、嘘舌り續けて居る中に、自分のお腹が空いて堪まらないものだがら、始めてア、遲くなつたといつて立ち上る。

私が、或奥様に貴女はお姑を持ちませんでしたねエといつた所が、はい左様ですが　何うしてお解りになりましたかと尋ねる。貴女が我儘で自制する様子が見えないから解つたのですと

いふ。其上貴女の夫の方が柔和な方であるから、愈々益々我儘になる、其結果は時々我儘のヒステリーを起して自ら苦んで居る。斯ういふ女は得て嘸舌り勝ちである。感じたことを直ぐに語り見たことを直ぐに嘸舌るので、少しも理性の篩を經ないのである。人間は見たこと感じたことを語る前に、早速に理性を通過せしむる作用がなければならないのであるが、斯ういふ女に限つてそれがない。

家族制度と婦人の鍛錬

家族制度は段々廢れて行く。娘を持てる親が家族制度を主張して居るにも拘らず、其娘を嫁に遣る場合には男姑や女姑のある所を避けて、夫婦差向ひの出來る所へ嫁に遣りたがる。『自分の娘を除いての家族主義』では其主張に權威はない。家族制度の弊は既に指摘せられて遺憾はない位であるが、家族制度が此感情の奴隷となる婦人を鍛錬したことは、爭ふことの出來ない事實である。若し家族制度の鍛錬を經ることが嫌ならば、新に理性の鍛錬を經ねばならぬ。理性の鍛錬のない解放は、適々女を我儘に自墮落に導くものであり、惡魔の手に渡すものである。

佛蘭西の女の話し

私は日本に居つた或佛蘭西の女に交つたが、此女が日本の奥樣には意見といふものがないといつた。成程、日本の奥樣の語るものは何んだといへば、御亭主の自慢、左れど流石に普通は口には出して言はないが、處々に現はれる。所が其子女のご自慢は全るでさらけ出しだ。日本の母は子女を愛すること世界に冠たりといふが、何うも理性の批判のない盲目的愛ではないかと思はれる。それからハウスホールド・ドラッジエリ即ち臺所仕事を繰り返へし繰り返へし話す、而もそれが盡く斷片的で、眼に入つたことや、耳に響いたことを反射作用的に、切れ〴〵にいふのであるから、纏まつたものは一つもない。從つて意見が立たないのである。意見が立たないから、進歩とか改良とかゞ自發的に出來ない。日本の進歩改良は他力で促進されたものに過ぎないやうだ。

意見とは何ぞ

現代に於ける意見といふは、第一に現實を視ねばならぬ。そして現實と現實とを比較し、批判し、綜合したものであつて、更にそれが現實を改良して行くものでなければならぬ。それには小說を讀んだり、講談本を讀んだり、都て感情や情緒を刺戟するものばかり讀んで居ては駄目である。

六、感じたことを直ぐに行ふのもいけない

何故に萬引する

感じて直ちに行ふは間違ひである。これが人眞似となり、摸倣摸擬となる。これからの人間は『感じて考へて行はねばならぬ』考へるといへば、後でも申しますが、經濟的に打算することである。自分の生活を振り返つて見て、それから實行することである。感じて考へて行ふからといつて、決して時間の要るものではない。詰まり一つの心の作用習慣を作るの問題である。奥様の中には、百貨店で萬引するものがある。これは感じて直ぐ行ふ極端の例であるが、誰でも珍らしい欲しいものを見れば、買ひ度いと思ふと同時に、懐工合を考へる迅速な心の作用がある。それを人間萬事に應用すれば可いのである。其處へ行くと東京の女よりも、關西の方が打算的であり、經濟的であり、理性的である。關東は韻文的で、關西は散文的である。明白に關西の女の方が關東よりも進んで居るが、關西の女の經濟的といふのが恐ろしい缺陷を持つて居る。

感激

曾て京都に太平洋會議が開かれた時に、英國からトインビーといふ人が出席した。日本及び日本人に關する批判をマンチエスター・ガーディアンに載せたが其中に『日本人は甚だ感じ易い、感動し易い、感激し易い人間だ』と書いてありました。これは日本人を褒めたものと取つてはならぬ。端的、日本人の缺陷を暴露したものである。そして一氣に『日本人は甚だ實行を好む人間である』と書いてあつた。これも亦端的日本人の缺陷を暴露したものである。人間に感激は必要である。感激のない人間は木石である。行屍奔肉である。私の一生は感激の一生である。私は第一に日本に生れたことに感激したのである。日本に生れたことに感激したといふのは、日本がエライ國だとか有難い國だとかいふだけではない。日本に生れた限りは、私の力の及ばん限り、日本の進歩發達に寄與貢献して、そして日本を以つて世界を引摺つて、世界をして進歩發達せしめたいといふ感激である。私は私の母に感激せざるを得なかつたのである。母は三十歳にして夫を失ひ、それから寡居すること四十八年にして、數年前亡くなりましたが、私は幼少の時に斯かる悲劇に會つたのである。母の死するや、私は四首の詩を作りましたが、其中に『吾が母は家を愛し、吾れは國を愛す。母の心は死せずして吾が

心に在り」（滿場肅然）といふ句がありました。

左れども感激したゞけでは何にもならぬ。感激した時は、人間の心が純白となり、崇高となり天使のやうになりますが、感激は若しそれが意志となり實行とならねば、藁の燃えるやうなもので、一時には燄々として燃えますが、忽ちにしてこれが灰飛煙滅といつて、灰となつて飛び、煙となつて滅するものであります。さればそれをして灰飛煙滅せざらしめんと欲すれば、何うしたならば可いかといふに、それを吾が思索に移すことである。考へて其實現の手段方法を案出することである。

日本人は甚だ感じ易い、感動し易い、感激し易い人間であるのは事實である。左れど何時でも感じたゞけ、感動したゞけ、感激したゞけで御了ひになる。

所が同時に甚だ實行を好む人間といふのは、人間は生きて居る限り、若くは息をして居る限り必ず實行せねば生きられない。飯も喰はねばならぬ、茶も飲まねばならぬ、衣服も着ねばならぬ勞働して金を取らねばならぬ。日本人はそれを考へずに遣る風がある。それだから人眞似となり摸倣摸擬となるのである。

黄の章　相手を見た上に自己のものを造らねばならぬ

人眞似的實行

日本の歴史は大部分は人眞似の歴史である。個人としても人眞似、國としても人眞似であつた。『人の振り見て我振り直せ』といふ、明に人眞似ではないか。支那に西施といふ美人があつた。其顰するや（顔に皺をよせること）實に美しかつたさうです。そこで田舍娘まで顰することを眞似したが、愈々以つて醜くなつたといふことだ。これは珍らしくもないことで、美しい女の服裝を眞似て、醜い女が益々可笑しく見えることがある。日本の昔しの歴史は支那の摸倣であり、近代の歴史は西洋の摸倣である。日本には日本自身の積極的な經濟生活がない。日本の歴史は所謂唯物史觀がないから、如何にも空虛である。自分自身が生きるが爲めに、例へば日本食にせよ支那食にせよ洋食にせよ、之を喰つて自分の胃の腑で消化して自分の血とし肉とも骨ともするならば、多々益々外物を取り入れるのは可いが、日本には此積極的

な經濟生活がなかつたから、單に人眞似、摸倣摸擬に終つたのである。

政治だの外交だの法律だのといふ六ケ敷いお話は別として、私は一二三日本人が如何に人眞似をするかの例を擧げて見ませう。

柄の短いパラソル

皆様は今でも左うであらうが、柄の短いパラソルが日本に流行したことがあることは、私自身は知りませんが、皆様自身が經驗なさつたことでありませう。世界の大ブルジョア國米國から流行り出したのであるさうだが、何故米國に柄の短いパラソルが流行り出したかといふに、あれはブルジョアの奥様やお孃様が自動車に乘る時の便宜の爲めに、考へ出されたのであります。西洋人は外出が好き自動車をドライヴすることが好きです。去年伊香保に居つた時にも、伊香保は時々雨が降るので、米國の女が出るたびに、雨に濡れるといつて喞つて居ました自動車の乘り降りに、柄の長いパラソルはあちらこちらに支へて不便至極です。それだからオープンの自動車の中でも、長い柄のパラソルを指すのも不便至極です、そこで柄の短いパラソルが考へ出されたのです、案出されたのです。

然るに日本では、米國に柄の短いパラソルが流行るといふので、猫も杓子も柄の短いパラソルを買ひ、私なども買はせられたものです。自動車に乘つたこともない奥様や、自動車を見たこともないお孃さんまでが、爭ふて柄の短いパラソルを妙な風にさしかざして、あたいこそモガで御坐る。モダーンガールで御坐るといふのだから、遣り切れないではありませんか。

編み上げの靴――なら十分

女の惡口ばかりいふのではない。私は男も平等に惡口をいふ。御さし障りがありましたら御免を被りますが、日本の男の間には、編み上げの靴が流行ります。私の女學校に於ける講演を聽いて成程と思つて、廢めた人もあります。私は日本では毎日御勤めに出ない人間でありますから、日本服ばかりを着て居ます。從つて下駄を履いて居ります。下駄こそは國產品であると同時に、國粹品であります。尤も近ごろ支那桐が澤山輸入されるやうになりましたから、純粹な國產品ではないかも知れない。私の外國に居る時は洋服に編み上げの靴です。西洋では朝ベッドから下りた時に、編み上げの靴を穿き、夜寢るまで穿き續けて居るのです。日本でも學校や諸官省や會社銀行に出勤される方々には、朝出る時に穿き、晩歸つた時に脫げば可いのであるから、至極調法であるかも知れません。左れども日本風の家を訪問す

る時には、誰も大いに閉口するのです。例へば私が編み上げの靴を穿いて家を出でゝ、二三軒先きの友人の家を訪問するとする『御免下さい』『サア御上り下さい』『一寸待つて下さい』といつて、それから兩脚に穿いて居る編み上げの靴の紐を解き、それから靴を脱ぐ、歸りには奥様が送りに出て來て『さよなら』といふ。さよなら所ではない『一寸待つて下さい』といつて、編み上げの靴を穿きそれから編み上げの靴の紐を結ぶ。面倒此上ないことだ。それから七八軒先きの家を訪問するとする。『御免なさい』『御上り下さい』復た『一寸待つて下さい』といつて、編み上げの靴の紐を解き、それから靴を脱ぐ。歸りには今度は主人公から夫人から、書生下男下女までが見送る。『左様なら』『一寸待つて下さい』それから前のことを繰り返へす。編み上げの靴を穿き、編み上げの紐を結ぶ。東京では編み上げの靴のことを『さよなら十分』（大笑）といふ。

編み上げの靴は、能く足について歩くに便利である。歩くに便利であるといふは、即ち歩くに經濟といふ意味だ。其上靴下が切れないといふことだ。歩く經濟の爲めに案出された編み上げの靴が、日本は西洋と其生活を異にするが爲めに、恐ろしく不便のものとなる。ア、綺麗だとか、美しいとか、お品が佳いとか、體裁が可いとか感じたゞけで、直ぐに行ふことの往々斯かる錯誤に陷ることを知らねばならぬ。

辷り易いスリッパ

今一つある。これはスリッパーだが、私はスリッパーのことを『キング』に書いて、スリッパー製造業者に大いに怒られたことがあつた。若し商賣の邪魔になるとあつては、御氣の毒だと思つて、平あやまりにあやまつたことがあつた。スリッパー業組合と草履業組合とは大競爭を遣つて居るさうだ。私はそんなことは一向に知らない。中には私が草履屋から頼まれて、斯かる記事を出したのだらうと推察したものもあつたといふことだ。そしてスリッパー業者から、上等のスリッパーを贈つて呉れた。私がスリッパーに對する非難は滑り易くて歩くに不便であることだ。其後も時々スリッパーで閉口する。

スリッパーは英語のスリパーリーから來たものである。スリッパリーといへば、滑り易いことである。スリッパーは形容詞を名詞に直したもので、直譯すれば『滑り易いもの』といふことである。

西洋にもスリッパーがある。それは寢臺の下に置いてある。私は西洋では夜起きる時の外は、スリッパーを穿いたことはない。朝穿いた靴で、何處でも歩き廻るのであるから、スリッパーの

用はない。それだから何處に行つても、スリッパーを用意しては居ない。然るにそれが何故に寢臺の下に置いてあるかといふに、例へば夜便所に行く、又は夜半に電報で起される。さういふやうな場合に、一々靴を穿いては居られない。編み上げの靴などを穿いては居られない。依つて斯かる場合の用として、スリッパーが考へ出されたのである。故にこれも時間の經濟といふことになるのである。西洋の發明品で新案物で、人生の經濟と結びついて居ないものは殆ど一つもあるまい。

然るに日本では西洋にスリッパーがある。それは藁で造つた草履よりも體裁が好いといふので早速到る處で採用されたのである。何時ぞや私が親戚の娘を連れて、熱海に遊びに行つた。常磐館といふ旅館に行つた所が、四階に案内された。私は始めからスリッパーを穿かないで、足袋跣しの儘昇がつて行つたが、其お嬢さんはスリッパーを穿いて二階まで昇つた。所が滑り易いので、二階から四階まではとても昇がり切れないと思つたのであらう。二階からは右のスリッパーを兩手に推し戴いて（大笑）昇がつて行つた。オイ、スリッパーは足に穿くもので手に持つものではないといつたが（笑）でも仕方がありませんとの答へであつた。

私が或時東海道の或旅館に入つた。幸に其處に草履があつた——今日此學校では幸に草履があつた。それは此通り冷や飯し草履であります（大笑）——私がそれを穿かうとした所が、番頭がスリッパーを捧げ來つて、それを穿けといふ。俺れは草履を穿くといつた所が、番頭の曰くだ草履は下々のものゝ穿くもので、スリッパーはお客様の穿くものですといふ。一體何んな法律があつて、若くは不文律があつて、下々のものは草履、お客様はスリッパーと極めたのである。スリッパーを穿きたい方は勝手にお穿きなさいだが、俺れは下々のものだから、スリッパーを穿くのだといつた所が、番頭が何うしても承知しない。俺れは歩く經濟の爲めに草履を穿くのだといつたが、歩く經濟なんてことは、日本語にはないやうで、番頭さんには解らないで、私に強ゆるから、私は大負けに負けて、スリッパーを穿いて、長い廊下を滑り〳〵歩いた。それから梯子段を昇るのだが、それは一と骨折りだ。スリッパーが滑り落ちさうになる。だから滑り落ちないやうに注意を拂はねばならぬが、右の足のスリッパーを喰ひ止めると、今度は左の足のが滑り落ちさうになる。それを喰ひ止めやうとすると、兩方とも滑り落ちさうになる。それを落ちないやうにすれば、自分自身が落ちさうになる（笑）

二階の一室に案出されて、スリッパーを室の入口で脱ぐ。男は構はないが、女は小笠原流だか何だかは知らないが、チャンと揃へて體裁よく脱がねばならぬ。然らざれば女中からあの奥様は御行儀が悪るいとか、あのお嬢さんはだらしがないとかいはれる。

偖て晩餐が済んでから便所に出かけるとする。部屋の前で恭しくスリッパーを穿いて、長い廊下を滑り〳〵歩かねばならぬ。そして便所の前で謹しんで脱がねばならぬ。そして恭しく便所の草履を穿かねばならぬ。若し大便の場合であつたなら、直ぐに謹しんで便所の草履を脱がねばならぬ。そして恭々しく大便所の草履を穿かねばならぬ。用が済んだなら、更に謹しんで大便所の草履を脱いで、恭しく便所の草履を穿き、謹しんで便所の草履を脱ぎ、更に恭しくスリッパーを穿いて、長い廊下を滑り〳〵歩いて、部屋の前で謹しんでスリッパーを脱がねばならぬ

（滿場大笑）

凡そ此位歩く便利、歩く經濟を考へないで、シチ面倒のことを平氣でそして無意識で遣つて居る處が何處にあるかといへば、それは唯日本があるばかりである。

七、經濟と言ふ意味

新しい日本は日本人自ら考へ出さねばならぬ

感じて直ぐ行ふの弊が摸倣となることは、これでも解るではありませんか。日本が明治以來遣つて來たことは、皆此人眞似小眞似であります。それが今行詰つて、日本は一新機軸を出さねばならぬ。新らしく生活の工夫をして、舊い日本でもなく、西洋の摸倣でもない所の、世界の新日本を創造せねばならない位置に立つて居ることを皆様は承知して居らねばならぬ。

人間は感じて直ぐに言つてはいけぬ、感じて直ぐに行つてもいけない。感じて考へて言ひ、感じて考へて行はねばならぬ。感じて言ひたい行ひたいとする所に、それを止めるものが出て來るそれが理性の閃めきである。此理性を養ひ、感じたと同時にそれが迅速に機敏に心の中に働きかけて來るやうにせねばならぬ。感じたことや見たことを其儘に何の連絡もなく斷片的にヘラ〳〵語る女位、品位のない下劣なものはない。

人間は何うしたなら生きられるか

日本で經濟といへば、銀行が何うとか、爲替が何うとか、關稅が何うとかいふので、經濟學の講義をするに過ぎないが、日本人は感情人であり、情緒人であつて、經濟人になつて居ないから、我々は先づ最も廣い意味で經濟といふことを理解してからなければならぬ。私は曾て『人生は經濟である、經濟がなければ人生がない』といふモットーを拵へて、之を友人に頒つた所が、非常な贊成を得て、これは東洋にない新思想で、そして頗る堅實なる思想であるといはれた。

先程人間は生きねばならぬといつたが、生きるには實は經濟でなければ生きられないのである。經濟學の所謂經濟が經濟ではない、人生其ものが經濟でなければならないのである。

日本で經濟といへば、金錢を消極的に使ふことである。喰ふものも喰はないで金を貯ることである。取るものは取つても出すものは出さないといふのである。これは乞食の經濟である。

金錢と雖も決して浪費してはならぬことはいふまでもないが、浪費してならないものは決して金錢ばかりではない。本當に生きるには肉體も精神も物質も一切浪費してはならないのである。浪費してはならぬといへば消極的になる。人生には此消極主義がなければならないことはいふまでもないが、人間の生活を不斷に充實し、豐富にし、向上せしめ、發達せしむるには積極主義がなければならぬ。積極主義の爲めの消極主義である。若し積極主義のない消極主義に墮すれば、人生は忽ちしにてオーシスのない沙漠となり、滿目荒涼たる世界を現出せねばならぬ。

關西の女と關東の女

關西の女が經濟的だといふが、成程關東の女のズボラなるに比して、經濟的であるに相異ない。左れど此經濟といふのも、理性から來た經濟ではなく感情から來た經濟ではあるまいか。直ぐに十圓を出すのが可いのである。十圓出さねばならぬ場合には、まさか日歩などを勘定する必要もあるまい。十圓を出すのが可いのである。それを十圓出すのは大金を出すやうに思ひ、五圓、二圓、三圓を小出しに出すのは、金を出すのが惜しいといふ感情に支配されるからである。そして斯かる女は金錢を見るが、相手を見ない。相手の心に何う響くかに就ては、一向にお氣が附かない。

關東人は往々にして『身分不相應な贅澤』をする。これに反して關西人は往々にして『身分不相應の吝嗇』をする。孰れも理性の發達して居らぬ證據である。感情は極端から極端へと走るのである。關東は一の極端に走り、關西は他の極端に走つたのではあるまいか。關東では三等に乘る

のが身分相應であるにも拘らず、體裁の爲めに一等に乘つたり二等に乘つたりする。これに反して關西では一等に乘つて差支へのない人が、三等や二等に乘ることが珍らしくない。大臣の年俸は何ほですと訊いて、七千圓ですといはれ、私の家の番頭には一萬圓を與へるといふ人は、一等に乘つても差支へないのであるが、斯かる人が三等に乘ることが珍らしくない。中には自分が二等に乘つて、細君を三等に乘せることがある。細君を三等に乘せねばならぬならば、自分も三等に乘るが可い。若し自分が二等に乘らねばならぬならば、細君も二等に乘せるのが當然ではないか。要するに金錢の打算ばかりではない。相手に何ういふ影響印象を與へるかを考へて見ねばならぬ。十圓貰ふ權利のある人に、五圓、三圓、を小出しに出せば、相手の心持ちを惡くし、從つて其能率に影響して來るに相異ない。

身分不相應の吝嗇

極端の例を擧ぐれば、關西の或縣に二人の身分不相應の吝嗇家があつた。これは其縣の確かな人から聽いた話であるが、或大いなる銀行家がある。家族のものが魚を喰ふさへ嫌やな顏をする。そこで細君や娘が共謀して魚屋の通帳を二つ作り、一つは主人に見せるもので、それには干物とか、鰯の頭を買ひ入れたことのみを記し、別の通帳で高い

魚類を買ひ入れ、番頭をして密かにこれを拂はしめて居るといふ。これは主人が餘りに吝嗇なるが爲めに、家族をして反逆せしめたのである。

主人が吝嗇な爲めに、家族が反逆した例はまだある。或大ブルジョアが其家族にピアノやオルガンは高いといつて買つて呉れないので、或時細君や娘が共謀して一千圓のピアノを買ひ、寄つてたかつて手垢を附けて、三百圓の古る物がありましたから、買ひましたと主人に告げたさうだ。一家には反逆なく、虚言なく、詐術なく、圓滿にして『一室春風に坐す』といふ趣がなければならないのに、主人の吝嗇が斯かる殺風景な場面を現出したのである。

これも大阪附近の一例であるが、金持の主人が吝嗇である爲めに、細君は宛も寶の山に居つて手を空しうして生きて居るやうなものだから、平生不平の念に堪へない。そこへ或惡者が登場して來て、其惡者夫婦と細君とが相謀つて、主人の印形を出して郵便貯金や銀行預金を引き出し、其上株券まで賣つて了つた。主人は怒つて之を發かうとしたが、若し之を發けば家庭のことが盡く暴露するので、到頭泣き寢入りになつて了つたといふことだ。

人間は身分不相應の贅澤をしてはならぬと同時に、身分不相應の吝嗇をしてはならない。共に

破滅の途を辿るのである。理性の教へる所は、身分相當の生活をせよといふのである。

八、働きかけて行く生活

經濟の目的

人間が經濟に生きるといふことは人間を完成せんが爲めである。私は幾多の專門家を知つて居る。中には立派な博士もあり學者もあるが往々にして其學問に負けた人を發見する。或學問を通じて人間完成の目的を達するといふのではなくして、人間を犧牲にして、學問ならまだ可いが學位の奴隷となるのである。

西洋に『人間は或物の總てを知り、そして各のものゝ或ものを知らねばならぬ』といふ格言がある。專門家は或ものゝ總てを知るのが當然であるが、同時に各のものゝ或ものを知つて、人間としての常識を養はねばならぬ。然るに專門家の中には、全く學問に捉はれて、學問以外のことには、全く盲目のものがある。東北にあつて、地球の經度や、緯度や、地球の傾斜を研究して居た爲めに、日露戰爭を知らなかつたといふ話がある。玆まで來れば、敬意を拂ふより外はないが。

人間は學問を研究するのは、人間生活に綜合し取まとめる爲めである。自分で其專門を人生に綜合して行くだけの作用がなければならぬ。

自分の學問に負けたり博士號に負けたりする他の一例は自分は博士であるから、天下自分の知らざるものはないといふ妄想や自我狂に陷ることである。

自分が博士だといふので、講演會などに出席しては、自分の面目や體裁にかゝると思つて居るものもある。それから自分は博士だといふので、何んな問題にも口を出したがる人がある。其いふ所を聽いて見れば、しどろもどろで支離滅裂である。一貫した根本の思想即ち判斷の標準が出來て居ない。これは日本人殆ど盡く然りともいへる。專門家は一つの專門——專門といつても今の專門は恐ろしく小さい專門である。專門家は總てのものゝ或ものを知り、それを綜合し哲學化して、其間に一貫する原則を發見する作用があつて、始めて人間としての完成が出來るのである。然るに日本の學者はそれを遣らない。文部省の伊東學生部長（學生部は思想部と改まり伊東君は依然思想部長である）が曾て『博士にならうと思つて學問をした時は、學者としての權威を失つた時である』といつた。

人間の商賣

學問ばかりではない、商賣をするのも其通りで、商賣をするのも詰り人間として自己を完成せんが爲めでなければならぬ。商賣に負けてはいけない。商賣に負けるといふのは、明日のことを考へないで、刹那主義に捉はれるのである。商賣は正直では出來ないといつて、自ら不正直の人になることである。金錢の奴隷となることである。日本の商人の中には不正直なものが多い。本當の商賣といふものは、意識的正直でなければ、決して利益を全うし得るものではないが、縱ひ不正直で商賣に成功したとするも、人間其ものを破滅せしめたのである。金錢を惜しむ爲めに榮養を構はない食を家族や店員に與へて、それが病人になつたやうな場合には、一文を惜んで百圓を損することになる。現に大阪の舊式の所謂町人の金持の居る處では、流行感冒が一番先に襲つて來るさうである。それは平生粗食して榮養不良に陷つて居るからだとのことだ。

私が大阪の實業家に交つて遺憾とする所は其經驗を綜合し哲學化されないことである。これは大阪の實業家ばかりではないが、大阪のやうに其生活が阿波の鳴門以上に旋渦を捲いて居る所では、其生存を全うし其營業を全うし、そして自己を完成せんとすれば、同時に社會に働きかけずには居られないのである。そこで始めて商都工都の生活の指導精神が成り立つ譯である。

女教員のヒステリー

女學校の女先生の間には極まり切つてヒステリーの人がある。これは無論結婚すべき年齢に達して居るに拘らず、結婚しないが其原因であるといふことだが教育家として立つ以上は、女の人間として生徒を薫育して行くべき筈のものであつて、獨立獨行が其本色でなければならぬ。獨立獨行といつたからといつて、結婚してはならないといふ意味ではないが、女教育家としては、教育家として人間を完成するのが、其主なる目的でなければならぬ。教育家として其性に負けるのは教育家としての意志が確立して居ないからである。

ヒステリーに罹つた女教員に取扱はるゝ女生徒は、頗るみじめなものだ。或生徒を偏愛し、氣に入つたものには出來ないものでも出來たやうにし、氣に入らぬものには出來るものにも出來ないやうにし、生徒に嫌や味などをいつたりする。

卒業生の結婚をする場合などには、或は言葉に出したり、或は表情を以つて之を艶美する。斯かる女教員が教室に這入つて來ると、忽ち一種肅殺の氣を以つて滿たされる。教育家は直接に人生に働きかけて行くべきものであるにも拘らず、反つて人生を害ふ。最も注意せねばならぬ

ことではないか。

九、人生は經濟である
經濟なくんば人生なし

希臘の教育の格言は『健全なる精神は健全なる肉體に宿る』といふのである。日本人は唯心主義といつて、心や精神を偏重した結果として、肉體を忘れた。近時漸く健康第一などゝいひ出して來た。日本人はこれから肉體を建設し、健康を樹立せねばならぬ位置に居る。一方では經濟生活を樹立し、一方では人間の健康を樹立するのが、日本の急務となつて居ることを理會せねばならぬ。

大阪は喰ひ倒れといふが、金を貯めることを主とした結果、家族や店員に極端なる粗食をさせて、喰倒ひれの反面には喰はず倒れのあつたといふのは昔しのことである。若し今日にもそれが存在するとすれば、それは昔しの因襲の遺物である。

大阪に立志傳中の人多し

今日の大阪の新商人や新工業家は、人間が肉體的物質的に生存するのは、道德や精神よりも先決條件である。小兒は教育するよりも先づ養育せねばならぬことを知つて居る、私は大阪の中川伊作といふ人の店舗を見學に行つたが、此人は立志傳中の人である。此中川君の話しに、私が最も注意するのは、私のみならず、店員一般の健康である。私は美食を與へない。所謂日本流の美食は、粗食と共に人體に害があるとも益はない。私は相當の榮養を與へるやうにして居る。相當の榮養を與へるといふことは、決して金の掛かるものではない。反つて頗る廉價に出來るのである。榮養食を攝るのは、食物の經濟で、そして胃腸の經濟で店員が健康で働けば、營業上の經濟である。此人は消極主義と積極主義とに徹底した人で、消極積極歸一、消極積極不二一如を體得した人である。私は大阪の資本家が之を體得するのみならず日本人全體が之を體得せねばならぬことゝ思ふ。

健康に生きるのが第一の經濟

經濟とは健康に生きて、人間を完成するといふ意味である。私は毎日必ず靜かに運動する。運動とは散歩する意味である。劍術も柔術もスポーツも結構であるが、勝敗を主とするに至つて、實は其弊に堪へないのである。劍術も柔術やスポーツを商賣

とするものはいざ知らず、若し健康の爲めといふならば、勝敗を主とするのが間違ひであるのみならず、健康といふ上からいへば、我々が運動といふのは、實は精力を運動の爲めに放散するのではなくして、運動に依つて消化を能くし、血液の循環を能くし、自分が其職務や學問をするに適當なる精力を蓄積する意味でなければならぬ。故に運動は靜かに遣るのが原則でなければならぬ。極端に筋骨を鍛へて所謂頑健となるのは、決して健康の本色ではない。日本語にも支那語にもないが、頑健でなくして、柳に風折れなしといふが、軟健が最も理想的の健康である。頑健の代りに剛健、軟健の代りに柔健といふ言葉を使つても可い。人間が健康に生きるのが、人間としての第一の經濟である。

それから運動は毎日遣らねばならぬ。私の如きは、雨が降れば室内で遣る。毎日遣らねばならぬものである。所が毎日必ず相手があるといふ譯のものではないから、一人で遣り得る運動を主とするのが、當然の原則であらねばならぬ。靜かに運動し、そして一人で運動するのを原則とすれば、それは散歩である。專門學者の說に依るも、歩くことが最も自然であるといふ。兩手を振り〳〵靜かに歩くのが、一番可い運動である。歩くのは相手が要らない。そして何時でも出來る。

相手があつての運動は、相手があれば疲勞するまで遣る弊に陷る。若い人間で精力の横溢して居るものは、時には猛練習、猛仕合を遣るのも可からうが、普通運動は疲れない程度、又は淡く疲れる程度で止めて置くのが當然である。

觀て此に至つて、日本人と西洋人とは、動靜全く其趣を異にしてゐる。日本人は靜坐して居る人間である。靜坐する人間は、靜止して居るが其本色であるから、立つて働くことが例外になる。これは人間の健康を建築する所以でないのみならず、人間の精神狀態にも恐ろしき影響を及ぼすものである。人間は肉體的に靜止して居ると同時に、精神的にも靜止して居る。第一に靜的生活は立つて働くことが卑賤なことになる。そこで日本人は上の階級は靜止するのを尊いとして、勞働を下の階級に委せる。お雛樣が頗る能く日本の生活を象徵して居る。それから日本のやうに男尊女卑の國では、男が勞働しないで女を勞働せしめ、女を虐使することになる。第二に勞働することが一時的になる。坐るが爲めに立つのであつて、休むが爲めに働くのであり、樂をせんが爲めに商賣をするのである。日本人の終極の目的が、小金を貯めて閑居することである。恩給を貰つて所謂樂隱居になり、樂に餘生を送ることになる。其精神的に及ぼす影響は頭腦が働かなくな

り、新らしい意見が立たず、新らしい發明や創造が出來なくなる。日本人は停車場のやうな處に入れば、極まり切つてベンチに腰を掛ける。それでなければ立つて居る。詰り靜坐して居るのである。何だが深い考へに耽つて、人生哲學でも考へて居るのか、非常時對策でも思案して居るのかと思へば、實はボンヤリ坐つて居るのである。

日本には有閑婦人が多い。此等婦人の多數は毎日〳〵ボンヤリ生きて居るのである。其お喋舌りのものは前に言つたやうに百パーセント、ナンセンスを語つて居るのである。家内の勞働は一切男女の召使に委かし、若し何か思つて居るとすれば、それは『小人閑居して不善を爲す』といふことではないが、戀愛の火遊びをすることではないか。

スポーツ

スポーツは西洋から傳つたものであるが、そして體操術も亦西洋から傳つたものであるが、西洋人だからといつて、家々皆機械體操を遣つては居らない。左れど日本人にして歩くものがないとすれば、西洋人にして歩かないものがないといつたが可いであらう。日本では戀を語るにも隱れて語り、四疊半で語るのが常であるが、西洋では男女相携へて外出して戀を語る。故に西洋の公園などには、ラヴアース、バスとかラヴアース、レーンと

かいふものがある。直譯すれば戀人の小徑といふことである。

> 人生は繰り返さればならぬ

私は子供の時分から、身體が非常に弱かつたから、非常な性急であるにも拘らず、毎日靜かな運動を繰り返へして來た。十年一日の如しといふが、二十年三十年、四十年、五十年一日の如しである。西洋に遊ぶに及んで私と西洋とが一致するのを見て、非常に滿足したが、日本人は西洋の奇拔な所、英雄的な所ばかり眞似たがるから、西洋人が毎日散歩することを平凡として、飛び越えて、いきなりスポ！ツを輸入し、而も勝敗が主となつて了つた。

友人の訪問を受け、又友人を訪問した場合に、一日坐り込み、一日坐り込まされ、運動の機會を與へられないには閉口する。旅館で雨が降つた場合に、廊下を散歩して居れば、女中に怪しまれる。停車場で運動して居れば、乘客に怪しまれる。或時九州の或停車場で汽車の到着が故障の爲め三十分ばかり遲れた。停車場は最も確實なる安全地帶である。自轉車も來ねば、自動車も來ねばトラックも來ない。依つて獨り運動して居つた所が、一人の百姓樣が頻りに私を眺めながら、考へ込んで居つた。私が運動の爲めに運動することが解らないで、私が彼つちへ行つたり此つち

へ行つたりするのが、怪しくて叶はなかつたのだ。終に考へついたと見えて、私の所へ遣つて來て貴方は何か落し物をなさいましたかと訊いたことがあつた。

日本人はまだ健康に生きることが、人間第一の經濟であることに氣が附かない。それで眞の經濟生活のありやうがない。

私は惡意なお嬢樣を引つ張つて歩く、先生は私をステッキ、ガールにする積りですかといふから、無論だと答へる。左れど私は貴女をステッキ、ガールにすると同時に貴女に健康を與へると答へる。

白の章　有閑マダムの御氣の毒な生活

十、植民地の有閑マダム

何にもせずに居る有閑マダム

臺灣とか滿洲とか朝鮮とかいふ日本の植民地に參りますと、處に依つては御役所とか大きな會社とか支店とかいふものばかりである。勿論小賣商人もありますが、これは全く蔭が薄い。會社の御役人と普通にいひますから、悉く御役人と見做して差支へがないのです。男の方のアラは今言ひませんが、奥樣連即ち正直正銘の有閑婦人を見るに、全るで爲すことなくして日を暮し、月を暮し、年を暮して居るのです。中には無論土着するものもありますが、多くは小金を貯め込んで、內地に返へるのを待つて居るのです。上海に三年も四年も居ながら、支那語一つ覺えやうとはしない。召使ひの支那のボイに一切を任かして、終日靜居して居るのです。

終日何うしてアヽ靜居して居られるものか、一寸もヂッとしては居られない、そして讀むか書くか歩くか何かせずには居られない私には、實に不思議で堪まらないが、有閑マダムの方から見れば、私の方が不思議に思へるのだから仕方がない。

靜居して居るだけならばまだ可いが、植民地の官吏やお役員樣は極つて內地よりも俸給を餘計貰ふ、日本は今や人口の過剩に苦しみ、猛烈なそして慘憺たる生存競爭を遣つて居ます。失職者

の多い國、學校を出て一年以上になつても、就職の出來ぬものが、ウヂヤ〳〵して居る時代、何にも植民地だからとで、內地に比して餘分――頗る餘分な俸給を拂ふ必要はないと思ひますが、餘分な俸給を貰ふて居るのが事實である。

有閑マダムの寶石倒れ

京の衣倒れといひますが、京都は衣倒れだけだ。大阪の喰ひ倒れといひますが、大阪は喰ひ倒れだけだ。嘘か本當かは知りませんが、神戸のはき倒れといひますが、神戸は履き倒れだけだ。これも嘘か本當かは知りませんが、堺の建て倒れといひますが、堺は建て倒れだけです。青丹よし奈良の都は古典的で、冬はいざ知らず、春や秋は氣候の頗る佳い處ですから無理もないが、奈良の寢倒れといひます、左れど奈良は寢倒れだけです。東京は見倒れだといひます。活動や劇場を見物するばかりではない、彌次馬の多い處ですから、見倒れといふのも當然だが、東京は見倒れだけです。

所が植民地に來て見れば、有閑マダムは此等を一身に兼ねて、猶それ以上の贅澤をして居るのです。

永住しやうとするものは、建て倒れになるが、これは專ら夫君に屬することゝして置きませう

が細君が其虛榮心から之を助長するはいふまでもない。植民地の有閑マダムは第一に衣倒れである。これは女に取つては不思議はないが、金錢に餘裕があるから、京都などの到底及ばない衣倒れを遣る。夫の俸給當てに二年間に支拂ふ約束で、素的な衣物を買ひ入れる。臺灣で聞いた所に依れば、三越とか白木屋が出張して來れば、俸給の比較的少ない細君は自分の衣物を質に入れて金を拵へ、それで新しい反物を買ひ、買ふや否や其反物を更に質に入れて前の衣物を受出し、そして其虛榮心を滿足せしむるのだといふことだ。

第一が此通り京都などの到底及ばぬ衣倒れである。それから喰ひ倒れでもある。家庭で贅澤をするのみならず、ホテルからホテルと御馳走を喰べて歩く有閑マダムが寡くはない。大阪の喰ひ倒れといつても、普通の大阪人は頗る質素である。流石に有閑マダムでも、女だけに酒を飲んだり、藝者を擧げたりはしないと思ひますが、中には婦人連が一處になつて、酒池肉林の騷ぎを遣るものもあるとのことだ。又盛んに役者に入り擧げるものもあるといふが、其點までは私は探訪しては居らない。植民地の有閑マダムは、兎に角大阪以上の喰ひ倒れである。

讀んで字の如く、有閑マダムですから用がない。奈良以上の寢倒れであることはいふまでもな

い。衣物をほどかずに其儘仕立屋に遣る。夜具布團なども其通りで、一切が仕立屋まかせで、當人は手を拱して、少しも手に觸れないのである。

見倒れは、有閑マダムだけに、活動小屋とか劇場とかに新らしいのが懸れば、殆どそれを見逃がしたことがない。東京以上の見倒れである。

京都以上の衣倒れ、大阪以上の喰ひ倒れ、神戸以上のはき倒れ、奈良以上の履き倒れ、東京以上の見倒れ、そればかりではない。寶石倒れといふ日本内地には一寸見られない倒れ方がある。

妾を置くといふことは決して善いことではないが、男たるものは其マダムを訓練せねばならぬ。曾て後藤新平伯が其夫人を喪つた時、伯に再婚を勸めた所が、伯は妾なら兎に角妻を貰へばそれ〴〵訓練せねばならぬといつた。男たるものは其マダムを訓練せねばならぬが、温室育ちの男と來ては、男それ自身に訓練がないから、其夫人の訓練のしやうがなく、概してヘンベックト、ハズバントと爲るのである。

皆様は決して斯かる生活を美んではならぬ、其子孫に及ぼす影響の實に怖るべきものがある。女の教育を放慢にすれば、其女の一生に崇る、其夫に崇る、それから其子孫に崇る。

吝嗇と贅澤及ぼす影響との子孫に

私は所謂『身分不相應な吝嗇』を爲す家や地方を視察するのに、斯うした處から大人物の出た例がない。其父母の吝嗇が子に遺傳し子の吝嗇が孫に遺傳するらしい。貰ふものは遠慮なく貰ふが、出すものは惜しんで出さないといふ傾向を持つて居る子供を發見することがあるが、斯かる消極主義に生れついた人間が、經濟上にせよ、政治上にせよ、生活上にせよ大成しやうがない。イジけた子女は一生世間から孤立して冷たい一生を送らねばならなくなる。

之に反して放漫な家庭に育つた子女は、生存競爭上の劣敗者になるのは解つて居る。植民地に生れたブルジョアや小ブルジョアの子女は錢勘定をしたことがない。又滅多に金錢を見たことのないものがある。電話で命ずれば何でも商店から持參して來る。支拂は傳票でやる。人生には與へられるものはない、宇宙間のもの皆買はるとエマーソンがいつたが、此等の子女は萬物皆與へられると思つて居る。

精神的の影響は是の如きものがあるが、肉體に及ぼす影響も亦頗る寒心すべきものがある。支那人は好んで精を養ふが、餘り强烈な養精劑を服んだ爲めに、それに耐へられないで死んだもの

があるといふ。日本人でそんなことを遺るものは先づないが、勞養ばかり與へ、贅澤品のみを與へ、其子女を盲目に可愛がれば、必ず肺病になる、必ず短命にして死す。斯かる有閑マダムの生んだ子女は生存競爭上劣敗者となるは理の當然である。

十一、母親と子供の病氣

人間は人と共に社會と共に生きるものであるから、常に社會に働きかけて行く用意がなければならぬ。それが勞働とか勤勞とかいふものである。紡績工場や製絲工場に働くばかりが勞働婦人ではない。常に社會に働きかけて行くのが勞働である。何ういふ風に社會に働きかけて行くかといへば、不斷に理知を以つて因襲や傳統を批判し、そして不斷に新らしい因襲や傳統を作つて行くことである。狹い經濟上の意味からいへば、男は生産的に社會に働きかけ、女は消費的に社會に働きかけて行くのであるが、私は之を狹く解釋するばかりではない。廣く解釋したいのである。

日本の御母さんが小兒を愛するや殆ど盲目的である。自ら子煩惱といつて居るものもあるが、

日本の御母さんは小兒が病氣になつてから俄に騒ぐ、玆にも日本人の性情が現はれる。日本人は俄に發病すれば、それに驚いて醫師よ藥よと騒ぐが、其病氣が慢性と爲れば一向に無頓着になる。これが母が其子を養育する場合にも現はれる。或御母さんの話に、次男とか三男が平生非常に丈夫であつたから、其健康には餘り注意をしなかつた。所が無理を遺つて助膜炎とか何とかに罹つた。それから驚いて半年も寢る眠も寢ずに看護して、全快させましたといつて誇り顏であつたが、私は若し始めから非常に丈夫であることが無理をし易くなるものであると覺りつゝ、平生能く注意して居つたならば、其子が肋膜炎に罹ることもなく、從つて半年も寢る眠も寢ずに看護する必要がなかつたのではないかと思つた。日本人には非常時の鍛錬があつて、平常時の鍛錬がない。日本の御母さんも亦其通りで、其子の非常時には献身犧牲の精神を發揮するが、毎日の生活に不斷の注意を拂つて、献身犧牲の精神を發揮せずに濟むやうにはしない。其子が丈夫であれば、なけ遺りである。其子の病氣に勝つて、敵に勝つたやうな誇りを感ずるが、敵を近づけないで平和を永遠に維持するといふ計がないやうだ。

最後の章

十二、勉強百圓運動百圓

運動と飲食

私自身で社會に働きかけ、其夫及び其子女をして社會に働きかけしむるには、第一に肉體の健康に注意せねばならぬ。其健康に注意することは大體分れて三となる。一は睡眠である。一は運動である。一は食物である。薄着をして風邪に罹つてはならぬといふことまで數へ上げれば、數限りもない。

今の學生は勉強し過ぎる

今の學生は恐ろしく勉強する。所謂寢る眠も寢ずに勉強する。教育の內容を批判する事は今見合はせるが、教育といふものは、子女をば只管に勉強させるクラムミング・システムといつて、詰込主義で無暗に闇記させるのではない。智育の方からいふも、マン・イズ・エンドジーナスで、人間は內から發達するものである。然るに今の教育の弊とそ

れから就學者の多い爲めと、試驗の恐ろしさに、子女が大勉強を遣る。教育とは教育と養育とが圓滿に行はるゝをいふので、西洋では勉強と遊戯との價値は同一のものとして居る。勉強の價値が百圓ならば、遊戯の價値も百圓である。然るに日本では眞の意味の遊戯がなかつた。毎日散歩せねばならぬといふこともなく、スポーツもなかつた。遊戯が惡戯になつたり、夜遊びや夜深しになつた爲めでもあらう。勉強を善事として遊戯を惡事とする風があつて、學校でも只管勉強させようとし、父母が其上に勉強を强ひ、然らざるまでも勉強するのを善事とする因襲から、其子の運動不足といふやうなことには毫しも氣付かないで居る。

早起きを奬勵するは善いことゝして、それならば夜早く寢かせねばならぬ。然るに學生は勉强するが爲めに夜深かしをする。それで朝は早く起きろといつてはそれは强慾だ。其子の肉體を忘れて居るのである。中には夜晩いから其代りに朝早く起きろといふものさへある。(大笑)

運動の風は近ごろ西洋から輸入されたが、前にもいつたが如く唯、スポーツのみが輸入される。日本の奥樣が日本の女は何うも運動しませんといふ。家に引ツ込んだ切りである。時折り出て行つても、それは活動寫眞館や劇場やホテルや人の家に坐り込む爲めに歩くのである。故に歩くよ

りは自動車に乘りたがるのである。自分自ら運動するの必要を認識し、且つこれを實行しないで、其子だけに毎日適當の運動をさせることは、縱ひ其必要を知つて居つても、怠り勝ちになるものである。

其子をば小學より中學、中學より高等學校、高等學校より大學に入れて、盡くこれを官吏にし、俸給取りにしようとする、そして恩給取りにしようとする。日本の因襲的生活論理からいへば、若し盡くがこれに成功したならば——盡くがこれに成功しやうとして事實努力しつゝあるのであるが、幸に大多數が失敗者なので日本は助かるのである——日本には勞働者も農夫も工も商もなくなり、日本國民は擧げて餓死せねばならなくなるのである。

ホテルの女中の經濟論

十三、運動が積極的經濟の基調

私が曾て相州の或ホテルに居つた。雨が降つたので外出が出來ない。ホテルであるから、草履がない。依つて足袋跣しで廊下をば散歩して居つたら、女中

さんが恭しくスリッパーを差出して之を穿けといふ、私はスリッパーでは滿足に歩けぬから要らぬといへば、それでは足袋が汚れますといふ。至極尤ものことだ。そこで問題が起る。足袋を犧牲にすることが不經濟であるから運動を中止すべきか、若くは運動は私の毎日の日課であるから、足袋を犧牲にしても運動を繼續すべきかといふのである。消極的なる日本の因襲からいへば、第一に室内で運動することが問題外である。足袋を汚すことは損に極つて居る。故に運動を中止すべしといふに歸着せねばならぬが、私は『健康に生きることが、人間第一の經濟だ』運動不足では物が甘くない。讀んでも愉快に讀めない。考へても明瞭に考へられない。足袋を犧牲にするも運動を繼續せざるべからずと決した。

ハイピッチかスローモーションか

スポーツでも若し劔術柔術を運動とすれば劔術も柔術も相手がなければ出來ないものである。相手があれば、毎日遣るが、相手がなければ、何日でも何月でも何年でも遣れない。且つ日本人のやうに勝敗が主になつては、徒に疲憊を餘し得るに過ぎない。運動を刹那主義で遣るのは間違ひで、商工農の經濟事業と同じく永遠の氣持ちで遣らねばならぬ。スロー・モーションで遣るべきもので、ハイ・ピッチで遣るべきものではない。ステップ

バイ・ステップで遣るべきもので、ハイ・ジャンプで遣るべきものではない。專門家はいざ知らず、普通の人にあつては、胃腸の消化を能くし、血液の循環を活潑ならしめ、自己の事業を完全に成し遂ぐる爲めの精力を蓄積するが目的でなければならぬ。

相手の要らぬ運動

運動は相手がなくても遣れるものでなければならぬ。英國の大宰相たりしグラッドストーンは毎日木伐りを遣つた。又福澤先生は米搗きを遣つた。これは皆獨りで遣り得るのである。そして最も廣く且つ容易に一人で遣り得るものは散歩である。散歩が最も自然で、スポーツや劍術や柔術は人間の作つたものであるが、歩くことは天の與へたもので、魚の泳ぐのと、鳥の飛ぶのと、獸の歩くのと共に最も自然である。所が日本人はこれを行はないのである。

又或時私の知れるインテリの奥様が、私が毎日缺かさず運動するのを見て、何故に然るかと考へ込んだ末、やつと考へついて、先生は喰べたい爲めに運動するのですねエといはれた。私は無論のことだ、無意義に運動はしない、能く喰べ能く啖ふ爲めに運動するのである。能く喰べるといつても、決して大食や過食を奬勵するのではない。運動するのは能く喰べ能く啖ふ爲めであるが能く食べ能く喰ふのが決して最後の目的ではない。これも人生の手段である。

運動せねば食が減る　運動すれば食が殖える

運動しない、食が減る。パンやウドンの如きものを喰べて居れば、金が費らぬ。豆を喰べれば衣物の袖が磨れて損するから、豆を喰べない。これは所謂消極主義の經濟である。第一には生命を削るものである。第二には人間の肉體的精神的の活動を微弱ならしめる。生命を削るといふは肺病で早死をする、其他の病氣で、不幸人生の途中で斃れるをいふのみならず、縱ひ長生きをしても、積極的に生命の實現が出來ないで、ヨボ／＼トボ／＼生きて居るのは、縱ひ家族や社會の厄介にならないまでも、人間として無意義の生存である。私は金が費かつても好い、成るべく能く運動し、成るべく能く喰ひ、そして社會に働きかけ、社會からして其報酬を求めんとするのである。若し社會が適當の報酬を與へなければ、其社會機構を改造するまでだ。これが私の經濟であり、人生經濟哲學である。

奴隷の經濟

乞食の經濟學は、貰つたゞけで出さぬことである。奴隷の經濟學は自分の生命よりも、自分の所有品が大事なのである。米國の棉花だか甘蔗だかのプランテーションに働いて居る黑奴があつた。歸途夕立に會つた。慌だしく其帽子をば取つて濡れぬ樣

小脇に抱へ込んだ。傍の人がそんなことをしては、頭がズブ濡れになつて病氣になるぞと注意した所が、其黒奴の曰く『此帽子は自分が買つたので自分のもの、此身體は主人のもの、だから身體よりも帽子の方が貴いのだ』といつた。(大笑)支那の漁船が破船して海上に漂流する。日本の汽船が航行を中止し、繩を投げて人間を救ふとする。支那の漁民達は先づ荷物を差出して、これから先に助けて呉れろといふ。支那の漁夫にあつては『生命あつての物種』ではなくして『物あつての生命種』である。(大笑)

日本人は支那人と違つて一切を感情でやるから、經濟をも感情で遣る。極右が『身分不相應の贅澤』で極左が『身分不相應の吝嗇』である。世界は益々經濟的となりつゝある。此身分不相應の贅澤は次第に消滅するに相違ない、日本人は同時に身分不相應の吝嗇からも免れねばならぬ。自分ばかり健康に生きても何にもならぬ。家族が健康に生きねばならぬ。家族が健康に生きるだけでは何にもならぬ。店のものが健康に生きねばならぬ。カーライルが若し市の貧民窟に熱病患者がありとする。それをスラムのことゝして放任すれば、一市が遂に熱病に苦しむやうになるといつた。

自分及び社會全體をして健康ならしめよ、此健康は勞働するが爲めの健康である。男が積極的に社會に働きかけ、女は消極的に社會に働きかけ、其協力を以つて『良からう安からう』(支那では物美價廉といふ)良好にして廉價なるものを生産せしむるに至つて、日本の經濟的生活、社會的生活の基礎が始めて確立したのである。

早飯し、早糞、早走り

日本人が『早や飯し、早や糞、早や走り』の人間であることは今更いふを待たない。これは昔しの軍隊主義をば其儘日常の平和生活に應用したもので、日常生活の破壞である。否軍隊の生活其ものに於ても、思慮ある大將は之れを遣らせないのである。或軍人の話しに、敵が來たといふので、五丁なり十丁なりをば駈け足させたならば、いざ發砲といふ場合に、兵士の息が切れて、狙ひ正しく發砲が出來ないといふ。戰場のことは常規を以つて律すべからざるに相異ないが、一時的の短兵急の戰鬪ならいざ知らず『早や飯し、早や糞、早や走り』で持久の戰鬪は出來ない。梅干、握り飯しといふも、これは火事場や戰場で、空腹で居るよりも腹を滿した方が增しだと思はるゝ場合に應用さるゝもので、一年も三年も繼續さるゝ持久戰に『早や飯し、早や糞、早や走り』や『梅干、握り飯』で續けては堪まらない。

これからは我々の生活法を一變せねばならぬ機運に際會して居る。昔しは武士は戰爭の爲めに生存し、農工商は武士の爲めに生存したのである。我々も終局は國家の爲めに生存するに相異ないが、此國家を支持するには、空間的には世界大の經濟生活と、時間的には悠久にして間斷なき經濟生活とを基調とせねば、此國家は支持出來ないのである。

食事に對する御母さんの無頓着

早や飯しはいかぬ。日本の御母さんは、其子が乳を離れて膳に就くに方り、何と教へるか。食事は何事よりも咀嚼(かむこと)が大事である。近ごろは食物に關する學問が大分進んで來て、食物のことを八釜ましくいふも、これも何うやら西洋の摸倣らしい。西洋人や支那人が氣長く食事をすることは、人の知る所である。日本人は『如何に死ぬるか』を教へられて『如何に生きるか』を教へられなかつたので、食物の選擇に無頓着であるのみならず、其咀嚼の大事なることに氣附かない。それだから早飯しといふ所以である。若し食事と咀嚼が孰れが大事かといへば、實は孰れも大事ではあるが、十分に咀嚼しないで、美食をする害と、粗食ではあるが、十分に咀嚼して胃の腑に送る害とは、孰れかといへば、其前者にあるは多言するまでもあるまい。

御母さんが始めて膳に就く子供に教ゆるには、當然よく嚼んで喰べねばならぬ、悠つくり喰べねばならぬ、一つものを多食してはならぬといふ風に教へねばならぬのであるが、今の御母さんは知らぬこと、我々時代の御母さんは行儀よくして喰べろといふやうなことばかり教へる、專ら形式の末に趨る。そして悠つくりして居れば、何故早く喰べないか、臺處が片附かないで困るぢやないかと怒鳴ることが珍らしくはない。

日本の御母さんに依つては、其無知なること驚くべきものがある。或英字新聞に書いてあつたのであるが、兩親が一人の八九歳の男の兒を連れて支那料理店に出掛けた。男の兒は支那料理が珍らしく且つ甘いので盛んに喰べて居た。御母さんは何んといひ出したかといへば、そんな意地きたなしを遣つてはいけぬ。御飯を喰べねばならぬといつて、御飯をよそつて遣つた所が、男の子はそんなものは家にもあるといつて、相變らず御馳走を遣つて居つた。英字新聞の批評に曰く小兒は其自然に從つて雜食を遣らうとするのだ。それを御母さんが强ゐて米を過食させ、日本人に特に多い胃擴張を增加して行くのであると。

米を喰つてはならぬといふことはないが、米ばかり又は米を澤山喰はねばならぬとは、孔子の

遺書にも、基督の山上の垂訓にもない、シナイ山の天啓にもない。然るに日本では米を過食するのみならず、米に對して一種の信仰を持つて居る。米をこぼすは勿體ないことで、御かずを殘らず喰べるは意地穢ないことであるといつたやうに考へて居る。全く非合理的である、トンチンカンである。日本人は斯の如く長い間自分の身體を無意識に虐待し來つたのである。今日、日本人の肉體を檢し來れば戰慄に堪へないものがある。

汽車の中での御辨當の喰べ方

汽車の辨當を喰ふ場合を見て居るに、大抵の人は米の入つて居る箱を大事に左の手に持ち、御かずの入つた分を下に持つか、又は何處か傍らに置く。そして米が主食物であるといつて居るから、專ら米を喰ひ、御かずは唯米を澤山喰べるのを助けるに過ぎない。米と御かずと孰れが高いかといへば、米が廉くて御かずが高いのはいふまでもない。そして米ばかりを喰ふよりも雜食をするのが好いのは、今日は先づ以つて定說である。洋食でも支那料理でも皆雜食式である。無意識に不經濟を遣ると同時に、無意識に不衛生を遣る。凡て生命を重んずるものに取つて、此位亂暴のことはないが、それを無意識で遣るから、生に對する無知は實に戰慄すべきことではないか。

御母さんから力んで見せる

御母さんが赤兒を御まるの上に抱いて行く、早や糞といつたとて、汚ない下卑た言葉と思つてはいけません。口から入れることが大事であるから、下から出すことも大事である。(笑)御母さんが御まるの上に抱いて行つて何といふかと見れば、ウンウンと力んで見せる。赤兒も早速其眞似をして力む。御母さんは小兒が食事をするに方つて、急ぎに急がせ、そして御まるの上で急がせる。私が日本の御母さんは其子孫に對して盲目の愛を持つて居るに過ぎないといふも、決して過言ではないと思ひます。

西洋人や支那人は上から入れる時には、悠つくり入れるから、下から出す時にも悠つくり出さねばならぬとするのであるが、日本人は上から入れる時にも、急いで入れるから、下から出す時にも急いで出さねばならぬ(大笑)日本人は世界一の愛國者であるとて自畫自讃して居るが、實際は無意識に國脉民命を縮めて居るのではありますまいか。

十四、總てが人間の生きる爲め

澤山な御腹の蟲

驚くことには、日本の御母さんは其小兒の腹に蟲が一杯巣喰つて居ても、一向平氣なことである。日本の女には意見がないといはれますが、其生活たるや社會に働きかけて行かうとはしないから、意見がない譯である。西洋の女も意見はありますまいといふて、自ら慰めて居る女もあるが、若し西洋の小兒の腹に寄生蟲が澤山にありとして、皆樣がそれで西洋の御母さんが承知するであらうか、泣き寢入りするかとお考へになりますか。西洋の細君は公設市場に買ひ物に出掛ける。肉なり雞卵なりが高くなつたとする。それを調べて見て價上りが不當であれば、一人の細君が高い處に上つて、演說を始める。他の細君が之を不當と見れば、忽ち之に贊成して不買同盟を遣る。日本の奥樣連にこれが出來るであらうか。日本の奥樣は所謂奥樣で、終日家の奥の方に引ッ込んで居て何事もせずに居る。そしてそれが誇りであり自慢である。孔子が小人閑居して不善を爲すといつたが、カツミイズムの兒玉勝美などは例外として、日本の奥樣は善事も爲さず、惡事も爲さず、唯茫んやり其日を暮して居て、西洋の細君のやうに社會に働きかけて行かない、少しも行かない。

小兒の腹に蟲が湧くのは、生の人糞を野菜の肥料とするからである。これは解り切つたことである。不思議なことは日本政府では法律まで作つて、其驅除を遣つて居るさうだが、それを官吏の仕事として居るから、結局空文になる。經國的の眼光からして生の人糞を用ゆることを廢めるやう農民を指導せねばならぬのです。人間の生きる爲めの農業である。其農業が人體に寄生蟲を送るとあつては、これは一日も等閑に附すべきものではないのであるにも拘らず、經國の位置にあるものは一向にそれを遣らない。更に不思議なのは農夫は自然に一番餘計寄生蟲を抱へて居るにも拘らず、生の人糞を肥料とすることを廢めない。支那の農夫は所謂人糞を糞土として用ひ、從つて寄生蟲が少ない譯であるが、支那の農夫の遣つて居ることは、日本の農夫が遣らない。そして御母さんは時々小兒にセメンを飲ます位のことは知つて居るが、これだけでは、從つて驅除すれば、從つて又寄生して來る。拔本塞源といへば六ケ敷いが、決して根絶法を取らない。眞に理性的に久遠的に小兒を愛するならば、日本の御母さんはこれを遣らねばならないのであるが、一向に遣らない。個人が社會に働きかけて行つて、個人も進み社會も進むのであるが、日本の婦人は決して社會に働きかけて行くことを知らない。恐ろしく靜止的である。因襲といふものは、若し不斷に理知の力で之を批判し、不斷に之を改造するの計がなければ、人は全く因襲の奴隷と

なり、因襲其ものを以つて人間の常道であると見做して怪しまざるに至るのである。

十五、三度の食事

雜食

最後に三度の食事の喰べ方を極く常識的に申上げませう。日本人は科學々々といつて、食事のことまで科學の言葉を使つて說明したがる。六ヶ敷いことでも成るべく平易に解り易く說くのが當然であるが、日本ではあべこべで平易で誰にも解ることをわざ〳〵六ヶ敷く說きたがる。何時ぞや高田早苗博士が洋行して其土產話しの中に『日本の大學では、平易のことを六ヶ敷く說くが、西洋の敎授は、六ヶ敷いことを平易に說く』といつたが、今に此風が絕えない。

これにはヴイタミンAがあるとか、Bがあるとか、CだDだといつた所で、素人には一々それを記憶し得るものではない。雜食を遣つて偏食を避けるやうにするのが、最も簡易な食事法である。尤も學問上のことも素人の心得て置くべきものは記憶するが可い。

日本人の味覺

日本人は食事まで感情で遣ることは、爭へない事實である。日本人も亦或意味では食道樂である。大阪人は喰ひ倒れといはるゝだけに、最も味覺が發達して居るといはれるが、味覺は日本人には一般に發達して居る。支那にも水經があり茶經がありますが、日本人と支那人と違ふ所は、支那人は料理の術に重きを置くから、食物其ものゝ本來の味を失ふやうであるが、日本の料理は物の本來の味を失はないやうにする。これが日本人が魚を生で料理する所以でありませう。西洋人が始めて日本人に接するや、日本人はラウ・フィッシュを喰ふと傳へ、それが生の魚がセレリーやトマトでも喰ふが如く、頭から尻尾まで其儘で喰ふものと解せられたやうである。其實これは生で料理したものである。

八百善の御客

味覺の發達した證據には、昔しの山谷の八百善に三人の客が來た。『目に靑葉山ほとゝぎす初鰹』の初鰹を出した所が、二人の客は默つて喰べたが、一人はこんなものは喰べられぬといつて、突ッ返へした。作り直して出した所が、これも駄目だといつて復も突ッ返した。主人が出て來て、手前の家では、材料を一々吟味してお客樣に差上げるのですが、何處が惡るいのか御遠慮なく御話し下さいといつた。客が此刺身は新しい砥石で庖丁を

研いだから、砥石臭くて喰べられないといつた。成程其通りであつたから、舊るい砥石で庖丁を研ぎ直して差出した所が、これならば宜しいといつたさうだ。

彦根の殿様

昔し彦根の殿様は琵琶湖の眞ン中から軟水を取り來つて茶に使つて居つた。

――琵琶湖も竹生島あたりの水は實際甘いものだ――ある風雨の夜、例の如く水を吸んで來いと命じた所が、風雨が餘りに激しいので、岸近くから汲んで來て差出した。早速殿様に發見されて御手打ちになつたといふ有名な話しがある。

味覺は斯の如く發達して居る。昔しの大和言葉で食物に對するものは、甘いまづい、おいしいおいしくない、好きだ嫌ひだ、これだけである。柿を喰へば冷えるなどいふは、これは柿は利尿的なることを知らなかつたので、全く見當違ひだ。食物に對する科學的方面の無知なることは實に驚くべきもので、西洋には學がある。支那には術がある。孰れも滋養衛生を大事としたものである。日本にも何月には何を喰へば可いとか、土用の丑の日に鰻を喰ふが可いとかといふことはある。其中には合理的のものもあるが、大體食物に對する科學的方面は全く無知であつたといふても不可はない。

酒を飲む爲の日本料理

且つ日本食は、料理屋の料理なるものは、喰ふ爲めの料理ではなくして、酒を飲む爲めの料理である。酒を飲むに都合の好いやうに出來た料理である。支那でも西洋でも、食慾を刺戟する爲めに酒を飲むのであるが、日本では其反對に酒を飲むことを助ける爲めの料理である。私が曾て此事を或處で話した所が、聽者の一人であつた中學校の校長さんが、後で私に自白したことがあつた。校長は始め日本料理が嫌ひであつた。然るに酒を飲むやうになつてから、支那料理よりも西洋料理よりも、日本料理が私の大好物になつた。日本料理は酒を飲むことを助けるやうに出來て居るといはれたが、洵に其通りであると。日本の女は此酒を飲む爲めた出來て居る料理法を改めねばならぬ。

御料理が飲む爲めに出來て居るのみならず、普通は味覺に即ち感情に任せて喰ふ。好きだから喰ふ、甘いから喰ふ、おいしいから喰ふ。偏食となり過食となることは當然ではないか。

日本人の喰ひつこ

喰ひッこをするのは世界恐らく日本人だけであらう。支那人は食道樂であるが、これは山海の珍味即ち有らゆるものを喰ふのである。二十種や三十種の違つた御馳走の出ることは珍らしくない。或る時は八十何種も出たことがある。これも大分阿呆ら

しいが、日本人の喰ひッことといふは一つ物を餘計喰ふのである。牛肉の喰ひッこ、汁粉の喰ひッこ、蕎麥の喰ひッこ、お正月には餅の喰ひッこ、これは生命知らずの遣ることで、日本人ならでは出來ない藝當である。

今は廢業したといふが、四谷の三河屋といふ牛肉屋に來た一人の客が、二十八人前平げて、身動きがならなくなつて、擔架に載つて歸つたといふ嘘のやうな事實譚がある。これは其主人から直接聽いたことである。

單調になり易き日本料理

十二月汁粉などゝいつて、一月から十二月までの汁粉を平げれば、懸賞金を貰へるのである。料理屋や旅館で魚ばかり出すから、野菜を持つて來いといへば、女中が極まり切つて、御魚は嫌ひですかといふ。一つものを餘計喰べてはいけないからといふのであるが、女中はそれを感情即ち好惡の問題と取る。私は友人の家に數限りなく厄介になるが、今では料理屋や旅館の食物の方よりも家庭の料理の方が餘程變化し改良して居る。家庭料理は日本食を離れないが、洋食や支那料理の調理法が加味されて、雜食式になつて居る。所謂モダーンになつて居るが、料理屋や旅館は舊態依然なのである。

御椀の中、即ちスープの中には魚肉の一二片が浮んで居る。向ひが刺身で、其左りが照り燒きで、二の膳には鮑が出る。海蝦が出る。或人が成程これでは『海の展覽會』であるといつたが、日本の料理屋は其豪處に行つて見れば、事實『水族館』である。西洋人は日本食を見て、フィッシュ、アフター、フィッシャ（魚のあとに又魚）だといつて驚く。

ホテルと自稱する或旅館に宿つた私が、革鞄の中からオートミールの罐を取り出し、それでオートミールを作つて呉れといつた所が、ホテルでは其作り方を知らなかつた。ホテルと名づけてオートミールの作り方を知らないとは何事だと詰つたことがあつた。伊香保でコーヒーが薄いからといつた所が、女中が其コーヒー湧かしの中に紅茶をさしたことは、昨年雜誌に書いたが、コーヒーや紅茶などは何うでも好いとして、或大きな旅館で、私自身がオートミールを作つて居つた。女中が來てそれに砂糖を入れようとしたから、砂糖は皿に取つてから加へるものだといつたが、其時に私は砂糖ばかりではない。序でに醬油を入れて煮附けたら何うかと笑つたことがあつた。

日本の御給仕

其女中が御給仕を遣る。日本の御給仕といへば、御客樣に『米の過食强制』をするに過ぎない。支那料理や西洋料理は皿を取り換へるから給仕が要る。日本料

理は冷たいものを一處に揃へるから、此點で御給仕は要らぬ譯だ。何の爲めに御給仕をするかといへば、昔しは宿屋の飯盛りといつて、米のお代りをするのが其職務である。此給仕には實際閉口することがある。客が食堂に集まるのではなく、家族制度の美風とやらで、銘々の部屋で食事をするのであるから、客の多い時には仲々巡り切れない。或旅館で晩餐を平生六時に出すやうになつて居るのに、七時になつても八時になつても持つて來ない。腹が減つて堪まらないから、催促をすると、へイ直ぐに持つて參りますと答へる。へイ直ぐに、へイ直ぐにを幾度と繰り返へして置きながら、へイ直ぐには持つて來ない。九時になつても持つて來ない。それはお給仕をしないで、宛てがひ扶持では客に濟まぬといふので、給仕の手のすくのを待つて居るのである。そしてお客様が如何に腹が減つて苦しんで居るかは、考へに上らぬのである。これも日本人が形式倒れである一の好證左である。日本に居る西洋人が此手で毎々弱らされる。

『も』で喰べてはならぬ『が』で喰べよ

マア惡口は此位にして、最後に三度の食事を常識的に喰ふ最も簡易の方法は『が』で喰べないで『も』で喰べることである。日本人は感情家であるから、一方に偏したがる。之を執一排他といつて甚だ惡い癖である。國家主義といへば、世界主義を排する。

世界主義といへば、國家主義を排する。萬物を兩立、否萬立させないで、或物を偏愛し偏重する。故に日本人の生活は『が』であつて『も』ではない。魚ばかり持つて來るから、野菜を持つて來いといへば、女中が貴下は御魚『が』嫌ひですかと問ひ返す。そして反對に野菜『が』お好きといふ結論に達して、今度は野菜ばかり持つて來て、私を坊主と心得、精進精理を出す。

私が山陽道の或處で、此事を話した所が、旅館の板場即ち料理番が聽いて居つて、翌日は野菜ばかりを出した、これは何ういふ譯かと詰つた所が、貴下の昨日の演說に依れば、魚『が』お嫌ひであるやらに取れたからだといふ。

感情を主とするもの

感情に歸着するものは、執一排他でなければならぬ。國家は人類として其歸着する所であるから、日本人は日本の國家に歸着せねばならぬ。日本人にして同時に英國人たり支那人たり得ないのである。これは二重國籍だのといつて、法律上や形式上の問題ではない。人間の精神上の問題である。個人の戀愛も同じことで、經濟を基調とせねばならぬが、其歸着する所は感情であるから、一夫一婦が當然である。同時に二人の男を愛し、二人の女を愛することは、歸一を求むる感情の許さぬ所である。若し同時に二人を愛し得るといふなら

ば、これは性慾の奴隷である。感情が最も溷濁した結果である。

理性を主とするもの

左れども感情よりは理性を主とするものがある。生活がそれである。商賣がそれである。工業や農業もそれである、衣も肉體を掩ひ、體温を保護するが主であつて、美服がそれからのことである。如何に麗はしい單衣であつても、冬之を着るものはない住も其通り、雨露を凌ぎ、寒暑を除ぐが主で、嚴冬積雪の中で夏のカムブを用ゆるものはない。食物も其通りで、腹に入つてから、それが如何に肉や血や骨になるかゞ問題で、味覺は唯其食慾を增加せしむるが爲めで、其作用は食慾を增進して、完全に肉體を養ふを目的とするのである。故に味覺を主とした喰ひ方は、人間が生きて行く根本の要求に背叛して居るので、日本人は即ち此背叛を敢へてしつゝあるのである。

故に支那料理『が』好きといつて、他の料理を排斥するのは間違ひだ。『が』は排他的で『も』は包容的である。私は支那料理『が』好きだといへば、他の料理が嫌ひといふことになるが、私は支那料理も好きだといへば、支那料理『も』好き、日本料理『も』好き、西洋料理『も』好き、肉『も』好き、『鳥』も好き、魚『も』好き、野菜『も』好き、果物『も』好き、何んで『も』彼んで『も』好き

といふことである。食物は宜しく此調子で攝るべきものである。（大笑）

感情の貴いことはいふまでもないが、それは今いつた通り、國家を愛する感情、夫婦相愛する感情、藝術を愛する感情が主であつて、其他は一切理性に下るべきものである。否愛國心も、夫婦相愛の心も皆理性を其基調とせねばならぬ。藝術も『藝術の爲めの藝術』ではなくして『生活の爲めの藝術』でなければならぬとは、既に斯界の定論である。

理性に下るといふは悠久に下がるといふ意味である。『感情に驅られる』といふが、感情に驅られる人間は、セツカチである。日本人がそれである。理性に驅られるといふことは有り得ないことである。理性は冷やかにして久遠であるからである。故に理性の人は氣の長い人である。支那人の理性は問題であるが、理性の人間たることは疑ひのないことである。故に支那人は悠久の人間である。

スピードの時代とは兩脚で驅け出すことではない

氣を長くしろ、スロー・モーションであれ、ハイピッチはいかぬ。ステップバイ、ステップであれ、ハイ・ジャンプはいかぬといへば、今はスピードの時代ではないか、フル・スピードの時代ではないかと反問するものがあらう。然り今はスピードの

時代である。リヤカーで路の上を狂奔して居る。アンナに駈けて何とするかと思ふこともある。左れどもスピードは機械の力で出すもので、人間の兩脚で出すべきものではない。汽車、汽船、モーター船、自動車、飛行機で出すべきものであつて、人間としては益々和平の工夫、靜定の氣象がなければならぬ。兩脚で不斷にスピードを出すといつて駈けて居れば、忽ち心臟破裂だ。而も其精神上知識上に及ぼす害毒は更に甚だしきものがある。落ちつきのない人間となり、斷片的の知識を持つて居ても、それを綜合する人間となり得ない。

人生は永遠の航海

日本人はスタート・ダッシュが好きである。ボート・レースとか、ランニングとかいふ距離の短いものは、それで可いが、マラソン競爭となれば、左うは行かぬ。山登りとなれは、左うは行かぬ。始めから落ちついて、段々に精力を發揮し得るものが最後の勝利者となるのである。人生は無限のマラソン競爭である。無限の山路を登攀するのである。ゲーテが『人生とは決して到着することのない航海である』といつた。味あるかな此言やで悠久の心を以つて、悠久に身を働かせ、悠久に勞働し、生產し、消費せねばならぬ。

（終り）

「お嬢さん」

一月三日、奥澤なる妹の家で開かれた歌留多會で、私が一度讀み手になつたが、能因法師の歌は『嵐吹く三室の山の楓葉は、立田の川の錦なりけり』といふのであるが、私が能因法師といつて『都をば霞と共に出でしかど、秋風ぞ吹く白河の關』と讀み上げたので、お嬢さん達不意を打たれてキョトンとして居つた。それから暫くお待ちなさいといつて、外字新聞にあつた『お嬢さん』と題する論文を飜譯して聞かせた。それは先生が書いたのでせうといふ。俺は第二回洋行の時、紐育で紐育ヘラルドに寄書した以後、英文を書いたことはない。それでも先生のいふことに能く似て居るではありませんか。先生の言にヒントを得て書いたのでせうといふ。其『お嬢さん』と云ふ論文は左の如し。

*　*　*

『お嬢さん』とは、日本の若い娘さんに與へられたる名譽の稱號である。一般に上流社會及び

中流社會の娘を呼ぶので、下層階級の娘には及ばない。上、中二階級の娘は綺麗であるや否やに拘らず、お嬢さんと呼ばれるのである。

『お嬢さん』は、政治や社會上の出來事には、頓と注意を拂はないのである。一年中何んな問題が起つたか、何んな事變が始まつたか、一向お構ひなしである。滿洲問題が何うならうと、豫算の赤字が如何に殖えやうと、爲替が暴落しやうと（お嬢さん達の輸入御化粧品が高くなるのに拘らず）物價が暴騰しやうと、憐れなるルンペンが食を得ずして餓死しやうと、所謂風する馬牛で日本に屬して居らない遠方の國から、海底電線を傳はつて來た報道のやうに、全く無關心である。所が之に反して、着物や髪飾りや、其他の流行に關しては、全心的なインテレストを持つて注意して居る。茲に一人の『お嬢さん』があるとする。洋服を着て、肱掛椅子に凭たれ、蓄音機で、アルゼンチン・タンゴを聽き、そして次の男爵邸のソワレー（夜會）に於て、如何に能くダンスをせんかと考へて居る。斯るお嬢さんは總べて銀幕の中の映畫女優の名を能く記憶して居る。例へばシルヴイヤ・シドニー嬢は一九一〇年八月一日紐育生れだ、そして『スルー・ディフエレント・アイス』の映畫に於て、フォックス映畫會社の爲にデビュー（初見參）した。其後間もなく

東（紐育）に戻つたが、直ぐに『クラムス』の映畫女優として傭ひ入れられた。然るにパラマウント會社では、他の映畫會社のスターに對抗すべき女優を失つたので、シドニー嬢をハリーウッドに呼び戻さんと決した、クラ、・ボーが銀幕から消えたので『シティ・ストリート』に於ける空席を滿すことになつた。そこでシドニー嬢は忽ち名高くなつた（此記事の飜譯を見て居た或るお嬢さんが、女優よりはもつと能く男優の名を覺えて居るわ、といつた）役者の名、スポーツマンの名、文士の名は頗る能く記憶して居るが、總理大臣の名前はといへば、一向にご存じがない。

或人がお嬢さんといへば、日本製でない高價な輸入品を消費し、社會に貢献する何物もないのであるから、實際無用の長物であると云ふ。記者はその意味を諒とするが、全然これに贊成するものでない。此深刻なる不景氣に下層社會の人間が餓死に瀕して居るに方つて、『お嬢さん』の呪はれるのは決して偶然ではない。左れど暫らく人生の暗黑面を忘れて『お嬢さん』のお嬢さんたる所以を考へて見れば、口も利けるし（支那では解語の花といふ）能く笑ひ、能く歌を謠ひ、ダンスを遣ることが出來る可憐なる人形ではないか、時としてはシャンの青年に憧れて感傷的に泣き、そして時々何もないのに燒餅を燒いて、罪もなき女中やおつ母さんに當り散らす。若し何處

にも『お嬢さん』が居なくなつたならば、終日乾燥無味な仕事に從事して居る男子は、其慰藉を發見することが出來なくなるであらう。『お嬢さん』は生れながらの女優であつて、コンサートホール（音樂會堂）やキネマやダンスホール其他を華やかに飾つて、一笑宛轉百媚生ずるのである。家庭をして艶やかな潤ひを生ぜしめるのは、此可憐な人形ではないか。往來でも若しお嬢さんが紳士の顏を斜めに見詰めたならば、紳士は嬉しい誘惑を感ずることであらう。

『お嬢さん』に關しては、幾多の古い傳統がある。子供の時から古典的の音樂を敎へ込まれ、或ものは頗るこれに上達して居る。此古風のお嬢さんは、縱ひ其ハートの中で或人を思ひ詰めても、決してそれを口に出さないのである。結婚に關しては、その兩親の命に維れ從ふのである。若し昔風の『お嬢さん』が傳統破りを遣れば、お轉婆として皆から排斥されるのである。顏の色は蒼く、食慾は少く、何事にか驚けば、忽ち悶絕するとは、此等の『お嬢さん』に對する好個の諷刺である。そして此等が氏もよく育ちも好い證據とされて居るのである。換言すれば、貧血症で、慢性的に便秘することが、お嬢さんのお嬢さんたる所以である。然るに近ごろ此傳統が廢れて、舊式の『お嬢さん』が年々減少しつゝある。これは疑ひもなく過去半世紀の間、日本を風靡しつ

つあつた西洋主義の影響である。新式の『お嬢さん』があちらにもこちらにも發見することが出來る樣になつた。世間は彼女等にモダーン、ガールといふ稱號を奉つて居るのである。昔しの『お嬢さん』とは全るでアベコベに、所謂女らしい嗜みもなく、淑やかな所もなく、スポーツに出掛けて行き、ランニングも遣れば、ジャムブも遣るのである。そして自分のお好みとあらば、ショート、スカートを穿くのである。此等の『お嬢さん』は勝手に好きな男性と戀愛に落ち、親の忠言などには、一切耳を藉さぬのである。彼等はキネマやダンスに關して特別の知識を有することを誇り、そして盛んに外國語の單語を口にするが、實は完全に外國語を理會して居らぬのである。或ものは、昔しは最も不似合として排斥された所の卷煙草も吹かせば、葡萄酒、麥酒も飲み、カフエーに行つてはカクテールや『戀人の夢』を命ずるのである。

明日如何なる新式のお嬢さんが輩出して來るか、大いなる期待を懸けてゐる次第であるが、恐らく根本的の變化を見ることが出來ないであらう『お嬢さん』といへば、相變らず、人生の輕快なる方面のみを見て、男子の想像も及ばぬセンチメンタル又はローマンチックのことを考へて居るのであらう。左れど『お嬢さん』は永遠に男子には必要缺くべからざる玩具として珍重されるであらう。

少し六ケ敷いことを

このパンフレットは小説よりも面白い處があると自信してゐる。小説は面白いといふが『事實は小説よりも奇なり』といふではないか。若しこのパンフレットにして小説よりも面白い處があるとすれば、そは人生の事實を批判したからである。

私は不斷に旅行してゐる。これも旅中の出來事であるが、或停車場で、男女小學校生徒の見送りを受けた。私は一々握手したのみならず、汽車に乘つてからも、窓の前に立つて丁寧に脱帽敬禮した。後、父母からの手紙に依れば、小學生徒が私の態度を非常に喜んで、あの先生は我々を大人扱ひして呉れたといつたさうだ。小兒は愈々多事なるべきそして愈々發展する將來の日本の擔當者、責任者であるから、私は其意味で敬意を表したのだ。決してタクトとか、機才とか、御世辭といふものではない。普通に『女、小供』といふが、私は小兒に對して敬虔の念を有するが如く、人類を繼續する責任を持てる女性に告ぐる場合にも、亦固より敬虔の念、大なる敬虔の念

を把持して講演し執筆するのである。

死んで行く人は、其過去を批判すべきだが、これから生きて行く人は、其將來を開拓することの出來る聰明とそれを實行する雄心とを與へねばならぬ。私は故に一寸したことにも注意を拂ふことを忘れないやうにしてゐる。これも旅行中のことだが、或朝、或停車場で切符を買はんとしたが、切符賣りが『一錢ありませんか』と訊いた。所が生憎一錢銅貨の持ち合はせがなかつた。兩方が困つて居るのを見て、一人の女學生が『私が御間に合はせしませう』といつて、一錢を出して呉れた。私は其際、宿處姓名を訊いても言ふまい。押問答をしては汽車に後れる。依つて何處の學校に御通ひですかと訊いたので、女學生は遠慮なく何々高等女學校だと答へた。

後、書面を其校長に送つて、右の生徒を捜し出して、厚く禮をいつて呉れと申し込んだ。校長が各學年を物色したので、この事が忽ち校中に擴がり、右の生徒は自分のしたことが、求めずして酬ひられ、そして生徒全體には、人は常に小善を爲す事を心掛けねばならぬといふ教訓にもなり、校長は大に滿足したといふ返事を寄越した。私のこのパンフレットは、日本の女性は今如何なる學校——否、時代に呼吸して居るかを示さうとしたのである。行き過ぎてもいけない、後れたは固

よりいけない。日本の姉妹の住んでゐる日本の時代にシツクリ合ふやうに考へた上のことである。

個人主義といへば、日本人は其語の眞の意味、內容を吟味しないで、一概にインディヴィヂユアリズム――個人主義といつて了ふ。そして個人主義を單に我利々々的のものと思つてゐるものがある。左れども皆樣に聽いて貰ひたいが、人間は各其個性を發展せねばならぬ、自我を實現せねばならぬことは言ふまでもないことである。生きるには自らの力で生きねばならぬ。他の力を藉りるにも、自分の力があつて、始めて藉りられるのであることは、誰しも異議のない所でなければならぬ。自分で起つ心持がなければ、他人の力で決して起たせ得るものではない、起たせても、自分で起つ意志がなければ、復た忽ち倒れて了ふ。

個人主義といふものゝ哲學上の眞意は此に在るのである。そして個人主義は、哲學者は分つて二つとするのである。一を外的個人主義（アウター・インディヴヂユアリズム）といひ、一を內的個人主義（インナー・インデーヴイヂユアリズム）といふのである。外的個人主義とは、今や日本も職業婦人が澤山に出來た如く、外に延びるのである。社會的に世界的に、換言すれば、經濟的に外に延びて行くのである。日本でいふ個人主義は、この外的個人主義が傳つたのである――言葉それ自身が舶來である。所がこの外的個人主義の眞の意義さへ、日本には理會

されてゐない。

然るに私が曾て獨逸のプロフエッサーに聽いたことがある。英米でいふ個人主義は、專ら外的個人主義をいふのであるが、獨逸は然らず兩刀使ひである。獨逸には別に內的個人主義なるものがある。前者が唯物的で、後者が唯心的である、內的個人主義は文化的に、道德的に、國家的に發展するを意味するものである。故に前者が平等觀的であれば、後者は差別觀的である。前者が平面的、地平線的であれば、後者が立體的、垂直線的である。

外的個人主義は物的生活を主とするものであるから、經濟的で。經濟的といへば、有無相通じて、其物質生活を充實し豐富にしやうとするのであるから、唯物史觀となる。獨逸の如きは文化國家主義の思想が普遍化されてゐるが、これでも西洋式なるを免れない。其以外の歐洲諸國は、英國も、又歐洲の末流である米國をも合せて、所謂唯物史觀である。

スカンデイネーヴイヤの小說家にシグフリツド・ウンデセツト女史といふがある。ノベル賞金を貰つた人である。其人の小說の中に、『小供に對する愛と男に對する愛との衝突』を描寫したものがあつて、英語にも飜譯されて居る。其大要は、或女が夫と離婚し、其間に生れた十何歲か

になる男兒及び其他を伴れて實家に戻つた。然るに其後其女に愛人が出來たので、その人と結婚しやうとしたが、其女が伴れ戻つた男兒と愛人との仲が非常に惡るい。そこで女は煩悶せざるを得なかつた。若し自分の子供に對する愛を全うせんとすれば、愛人に對する愛を犧牲に供せねばならぬ。之に反して、若し愛人に對する愛を全うせんとすれば、子供に對する愛を犧牲に供せねばならぬといふのである。

子供に對する愛は純愛である、精神的なものである。愛人に對する愛も、精神的でないとは無論言はないが、肉を離れない。肉といへば即ち物である。簡單に心の愛と肉の愛とも言へる。この或女の場合に於けるが如く、心の愛と肉の愛とが衝突した場合に何うするかといへば、日本では內的個人主義即ち道德主義、國家主義の國であるから、昔しからチヤンと極つてゐて文句はないのである。心の愛の爲めに肉の愛を犧牲にするのが當然である。再婚して性の慾を滿たすよりも、既に數人の子供もあるのであるから、此等の子供等に全心の愛を捧げ、以つて大なる後世を啓くべしとするのである。日本武士道の粹は此に在るのである。

西洋には唯物史觀のみあつて、唯心史觀がないから、斯かる問題が提起されて、一代のセンセーションを起すのである。

左れども現代は經濟の世界であつて、我々日本人は祖先以來、今度新に出版された墺國の著者アンイトアネ・チシユカ氏が其『日本と世界』とに書いてあるが如くに、日本は內的個人主義のみ發達して、專ら唯心的、道德的、國家的となつたから、經濟生活を賤み、肉體を忘れ物質を忘れ、一時は『世界の最貧强國』といはれた位である。强國は結構だが、貧乏では强國の位置さへ維持し得ぬことは解かり切つたことである。そして『日本と世界』との著者は、日本では『經濟的各勢力の自由なる發動』が許されなかつたといひ、又一度も『自由放任主義』の行はれたことがなかつたといつた。故に日本は其內的個人主義に加ふるに、更に經濟的、社會的、世界的なる外的個人主義を發達せしめねばならぬことも、亦誰れにも解り切つたことである。日本の商業が世界に向つて躍進しつゝあるは、日本國民が外的個人主義になりつゝある證據である。

左れども我々が豫じめ確實に理會して置かねばならぬことは、經濟が人生の目的であるか、將た手段であるかといふことである。經濟は人生の手段である。人性の眞の目的は、自己を完成するのである。自己を完成するには、自己と社會との一體なるを知り、社會を完成せねばならぬが

それだけで足れりとしないで、更に自己と國家との一體なるを味識し、世界を經濟生活の舞臺となし、そしてそれを以つて作つた富をば、文化國家の用に供して、始めて自己完成の極致に到着するのである。社會といひ、世界といひ、空間的、平面的のものであつて、經濟生活が其常態である。國家は時間的、立體的のものであつて、道德的、文化的、精神的生活が其眞面目である。國家は時間的だといつたが、日本國は祖先以來の日本國民が創造繼承し來つたもので、日本國民のみ唯其創造繼承に與り得るのである。世界に類のない特殊の文化、特殊の道德、特殊の精神、特殊の傳統、特殊の歷史、特殊の言語、特殊の宗敎、特殊の生活、之が日本帝國である。

日本を以つて世界を向上せしむべきもので、日本が自ら卑下して、世界の水平に下る必要は更に無い。

維新以來、日本の大勢を觀るに、常に原動と反動とがあり、或時は西洋主義、或時は國粹主義互に一を執つて他を排するやうであるが、日本が西洋唯物史觀の刺戟を受けて、一面外的個人主義になりつゝあることは、爭へない事實である。外的個人主義を十分に發揮して、世界の富國となり、同時に內的個人主義を忘れずして、否、外的個人主義を以つて、內的個人主義をば益す長養し、それを消極的、鎖國的ならしめずして、積極的となし進取的となし、日本の新文化を世界に布くこそ、日本人各自の目的で、又日本國家の目的でなければならぬ。日本の女性も亦此大體大綱を味識しておいて戴きたいものである。

茅原華山又識るす

昭和九年十二月廿四日印刷納本
昭和九年十二月廿八日發行

日本の女性に告ぐ

〔定價一部金貳拾錢〕

東京市品川區上大崎中丸四四四
編輯兼發行者　茅原退二郎

東京市芝區金杉二丁目十五番地
印刷者　永富實之助

發行所　東京市品川區上大崎中丸四四四　內觀社
振替東京四一一九一番
電話高輪三三八八番

不許複製

終